

加古川市

粟津大年遺跡

平成21年（2009）年3月
兵庫県教育委員会

加古川市

栗 津 大 年 遺 跡



空中写真 調査区遠景（北東から）



空中写真 調査区近景（北東から）

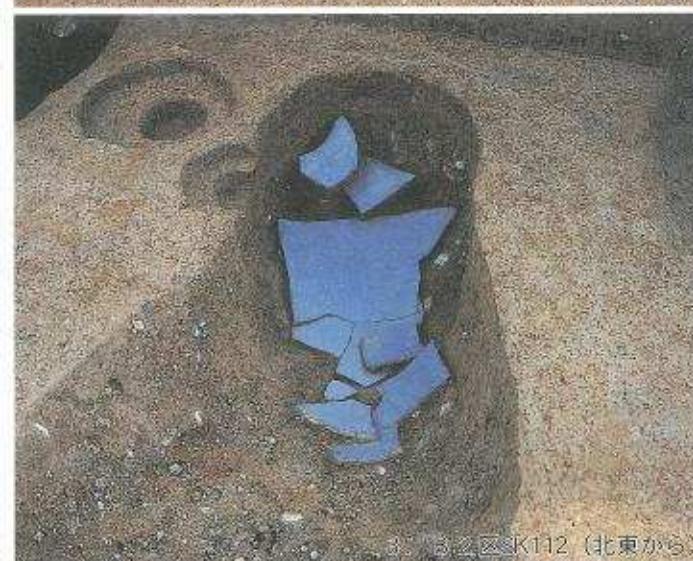
卷首図版2



A2区 SX001 (北西から)



B2区 SK105 (北東から)



C3区 K112 (北東から)



D4区 SK401 (西から)



5. 調査会員

例　　言

1. 本報告書は加古川別府港緊急街路整備事業の伴い、平成16・17年度の2カ年にわたり、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した粟津大年（あわづおおとし）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、兵庫県加古川市加古川町粟津（あわづ）に所在する。
3. 本文中の遺物番号は、本文・図版・写真図版を通して統一した。
4. 遺物のスケールは原則として縮尺1／4とした。
5. 本報告に使用した地図は、国土地理院発行の1／25,000「加古川」・「高砂」をもとに作製した。
6. 本報告書は第4章を除き、村上泰樹が執筆し、非常勤嘱託職員栗山美奈の協力を得て編集した。
7. 本報告書で使用した遺構写真は、村上・上田健太郎・篠宮正が撮影し、遺物写真は（株）谷口フォトが撮影した。また航空写真は（株）アコードに撮影委託した。
8. 自然科学分析動物骨同定については、（株）パレオ・ラボに依頼し、中村賢太郎（パレオ・ラボ）・樋泉岳二（早稲田大学）の両名が同定を行った。その成果は第4章に掲載した。
9. 整理後の遺物については、兵庫県立考古博物館に保管している。
10. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を得た。
岡本一士・西川英樹（加古川市教育委員会）、稻原昭嘉（明石市教育委員会）

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の方法	1
3. 整理作業	2
第2章 遺跡の環境	3
1. 地理的環境と中世遺跡	3
第3章 調査の成果	5
1. 確認調査の成果	5
2. 全面調査の概要と基本層序	5
3. 遺構	5
4. 出土遺物	7
第4章 栗津大年遺跡出土の動物遺物	11
1. はじめに	11
2. 試料と方法	11
3. 結果と考察	12
4. まとめ	12
第5章 結語	13
報告書抄録	14

卷首図版目次

- 卷首図版 1 上) 空中写真 調査区遠景(北東から)
下) 空中写真 調査区近景(北東から)
- 卷首図版 2 1. A 2 区SX001(北西から) 2. B 2 区SK105(北東から)
3. B 2 区SK112(北東から) 4. D区SK401(西から)

挿図目次

- 第1図 周辺の遺跡 4
第2図 粟津大年遺跡の動物遺体 11

表 目 次

- 表1 土器観察表 9
表2 石製品 10
表3 金属製品 10
表4 粟津大年遺跡から採集された動物遺体の同定結果 12

図版目次

- 図版1 周辺の地形
図版2 調査区位置図
図版3 調査区土層図
図版4 A・B区 遺構全体図
図版5 A・B区 遺構平面図(1)
図版6 A・B区 遺構平面図(2)
図版7 C・D区 遺構全体図
- 図版8 D区 遺構平面図
図版9 E・F・G区 遺構全体図
図版10 出土遺物(1)
図版11 出土遺物(2)
図版12 出土遺物(3)
図版13 出土遺物(4)
図版14 出土遺物(5)

写真図版目次

- 写真図版1 上) A区1・2全景(北東から)
下) B1区全景(南西から) 2・3. 溝近景(東から)
4. 南西側溝土層(東から)
5. 北東側溝土層(東から)
- 写真図版2 上) B2区全景(北東から)
下) B2区南西端近景(北東から) 写真図版7 出土遺物(1)
- 写真図版3 上) C区全景(南西から)
下) D区・E1区全景(北東から) 写真図版8 出土遺物(2)
写真図版9 出土遺物(3)
- 写真図版4 上) E1区全景(北東から)
下) E2区北東側全景(南西から) 写真図版10 出土遺物(4)
写真図版11 出土遺物(5)
- 写真図版5 上) E2区南西側全景(北東から)
下) F区全景(北東から) 写真図版12 出土遺物(6)
- 写真図版6 1. G区全景(東から) 写真図版13 出土金属器

第1章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

兵庫県東播磨県民局では、JR加古川駅西側を南北に貫く加古川別府港線緊急街路整備事業を計画していた。計画地の東には、すでに弥生・古墳時代の集落跡である粟津遺跡の存在が知られており、計画地内に遺跡が存在する可能性があった。そこで工事担当部局である東播磨県民局県土整備部加古川土木事務所と協議を行い、工事に先立ち計画地内の確認調査を実施した。

確認調査

確認調査（遺跡調査番号：2004174）は、平成16年6月17・23日に計画地内的一部に8箇所のトレンチを設定し実施した。調査の結果、工事予定地内的一部に中世集落遺跡が存在していることが判明した。さらに遺跡の範囲を確定するため、同年8月31日・9月15日に2箇所のトレンチを追加し、確認調査（遺跡調査番号：2004209）を実施した。また、工事予定地の南延伸部分についても平成17年5月～8月にかけて、本発掘調査と並行して4箇所のトレンチを設定し確認調査（遺跡調査番号：2005064）を追加実施した。

本発掘調査

以上の確認調査の結果、計画地内の中世集落と水田が存在することが明らかになった。兵庫県教育委員会では、担当部局と協議した結果、当該地の本発掘調査を平成16年9月1・2日（遺跡調査番号：2004205）と、翌年の平成17年5月25日から8月11日（遺跡調査番号：2005063）の2回に分けて本発掘調査を実施した。

平成16年の本発掘調査は、調査対象地の南端部にあたるG地区（53m²）を対象に行い、それ以外の本発掘調査は、翌年にA～F地区（1,039m²）を対象に実施し、遺跡の全調査を終了した。

2. 調査の方法

確認調査

遺跡調査番号：2004174（調査面積 38.9m²）

調査担当者 西口圭介主査（当時調査第1班）

調査は、計画地内に1×4mのトレンチを8箇所設定し、パワーショベルによって盛土・表土の掘削を行い、遺物包含層・遺構面精査は人力にて実施した。

遺跡調査番号：2004209（調査面積 19m²）

調査担当者 篠宮正生査（当時調査第2班）

調査は計画地内に2×5mのトレンチを2箇所設定した。表層の盛土およびアスファルト、旧水田耕作土や無遺物層などはパワーショベルによって掘削を行い、包含層以下の精査は人力によって行った。遺構は時代・性格の確定と遺構の存在する深さの確認に主眼をおいたため、遺構の一部のみの調査を行った。写真・図面による記録をとり。調査終了後埋め戻しを行った。

遺跡調査番号：2005064（調査面積 40m²）

調査担当者 村上泰樹主査・上田健太郎技術職員

工事予定地内の南延伸部に4箇所（2×5m）のトレンチを配置した。確認調査は、南端のTr 4→Tr 3→Tr 2→Tr 1の順で行った。調査はバックホウで覆土を慎重に掘り下げ、その後人力により遺構の検出を行った。必要に応じて写真・実測等の記録をとった。調査終了後、埋め戻しを行い、現状に復した。

本発掘調査

遺跡調査番号：2005063（調査面積1,039m²）

調査区は、A～F区の6区に分かれ、このうちB区およびE区は作業ヤードの確保、隣接地の生活道路の確保の必要性から2地区に細分し、片側を調査後に埋め戻しを行った上で、残りの調査を実施した。A区は、中央部分に水道・下水管が敷設されていたため、この部分の調査を除外し、その両側で1・2区に細分した。

上記したように、進入路の確保、作業ヤードの確保、地下埋設物の保全のため2回に分けて調査を実施した（第1回：B 1区・C区・E 1区・F区、第2回：A 1区・A 2区・B 2区・E 2区）。

第1回

調査はB 1区→C区→E 1区→F区の順で実施した。このうちB 1区・C区・E 1区はコンクリートないしはアスファルトを除去した後、バックホウで盛土・旧耕土を掘り下げた。包含層は人力で掘削した。除去した残土は指定の場所に仮置きし、調査終了後埋め戻しに使用した。

C区・E 1区（進入道路部分）は、路床改良およびアスファルト舗装を行い、現状に復した。

第2回

調査はA 1区→A 2区→B 2区→E 2区の順で実施した。このうちD区・E 2区はアスファルト除去後、バックホウで盛土・旧耕土を掘り下げた。包含層は人力で掘削した。除去した残土は指定の場所に仮置きし、調査終了後埋め戻しに使用した。D区・E 2区（進入道路部分）はアスファルト舗装を行い、現状に復した。

遺構は必要に応じて実測・写真等の記録をとり、遺構配置図はヘリコプターによる空中写真測量で作成した。各地区の全体写真は足場（3段2連）、高所作業車を使用し撮影した。

発掘調査工事は（株）富士土木興業が請負い、空中写真撮影は、（株）アコードに委託した。

2. 整理作業

整理作業は、平成19年度・20年度の2箇年にわたり実施した。平成19年度は兵庫県立考古博物館魚住分館（兵庫県明石市魚住町清水字立会池ノ下630-1）において、出土品の水洗い・ネーミング作業を実施した。平成20年度は兵庫県立考古博物館において、接合・復元、実測・拓本、トレース、レイアウト、金属器等の保存処理作業をおこない、報告書を刊行した。

第2章 遺跡の環境

1. 地理的環境と中世遺跡

粟津大年遺跡は、兵庫県加古川市加古川町粟津に所在する。遺跡は加古川市域の西南部に位置し、JR加古川駅の南、直線距離にして約700mの所にある。今回調査した地点は、JR加古川駅の西側を南北に貫く主要地方道加古川・高砂線沿いにある。遺跡の西側、約1kmの所には一級河川加古川が南流している。加古川下流域の両岸には砂堆が発達し、自然堤防を形成している。砂堆はとくに西岸で発達している。遺跡のある東岸域は旧河道が網の目のように流れ、旧河道の間に小規模の砂堆が点在している。

さらに東側の三軒家地区・野口町・坂本町付近では、旧加古川の浸食によって比高差1～2m前後の段丘崖が形成され、野口段丘が東に展開している。遺跡は、氾濫原内の自然堤防上に立地している。

そこで、さらに詳細な旧地形を探るため、昭和45年に加古川市が作製した地図（1/2,500）をもとに筆者が遺跡周辺の微地形を復元した。復元した地形と地図と合成したものが図版1である。

この地形復元図によると、粟津大年遺跡は、南北方向に延びる微高地上に展開している。この微高地の西・東側は、谷部が深く入り込み、微高地を限っている。調査結果でも北東側が高く、南西方向に低い地形が低くなっていく状況が認められ、この復元図と整合している。

周辺の中世遺跡の立地状況をみると、遺跡の北東側の溝之口遺跡なども、標高6m前後の微高地上に立地していることがわかる。また中世居館である細田構居跡は野口段丘上に立地している。平安時代後期の創建と考えられている中世寺院鶴林寺は、前掲の地形分類図では砂堆層上に立地している。しかし、微地形復元では微高地上ではなく、谷部に立地する結果となった。微地形作製時のデータの少なさが原因とも思われるが、ひとつの結果として提示する。

次ぎに遺跡周辺の中世遺跡について概観する。

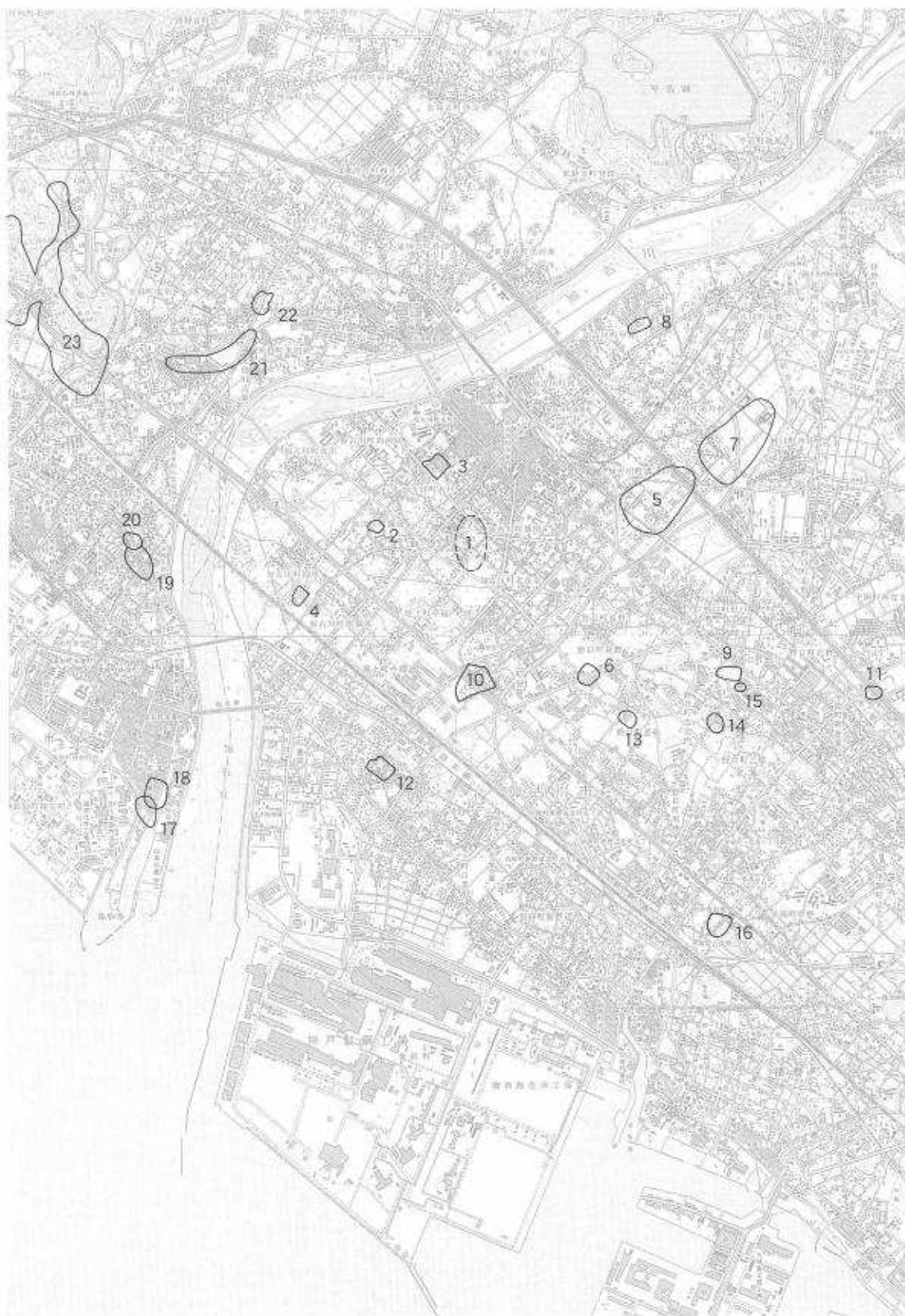
加古川西・東岸に展開する氾濫原内に営まれた中世遺跡の把握状況は、良好とはいえない。近年調査が実施された溝之口遺跡や美乃利遺跡での集落や水田の発見は、それまで周知されていた城跡・居館跡以外に弥生時代から中世にかけての集落跡・生産遺跡が氾濫原内に埋没している事実を提示した。粟津大年遺跡は、今回の調査で新たに発見された中世集落である。この発見によって加古川東岸の最下流域にも中世遺跡が存在する可能性が高くなった。

すでに周知されている遺跡としては、前述した平安時代後期に創建された鶴林寺（10）や沙弥教信ゆかりの教信寺（9）などの中世寺院があり、砂堆や段丘上に築かれる。また戦国期の横倉城（11）・古大内城（14）・野口城（15）・神吉城（16）は地形の安定した段丘上に築かれるが、石彈城（2）・加古川城（3）は氾濫原内の砂堆を利用して築かれている。また、中世集落の中心的な施設と考えられる居館は長砂構居（13）のように段丘上に築かれるものもあるが、稲屋構居（4）・細田構居（6）・中津構居（8）・尾上構居（12）といった、多くの中世居館が氾濫原内の砂堆上に築かれる。

参考文献

田中真吾・後藤博彌製作「加古川市およびその周辺の地形地質図」『加古川市史』第4巻付図 加古川市 1996

石田善人「鶴林寺の創建をめぐって」『加古川市史』第1巻第3章第4-3 加古川市 1989



第1図 周辺の遺跡

1. 薬津大年遺跡 2. 石弾城跡 3. 加古川城跡 4. 稲屋構居跡 5. 溝之口遺跡 6. 細田構居跡 7. 美乃利遺跡
8. 中津構居跡 9. 教信寺 10. 鶴林寺 11. 横倉城跡 12. 尾上構居跡 13. 長砂構居跡 14. 古大内城跡
15. 野口城跡 16. 神吉城跡 17. 東宮町遺跡 18. 高砂城跡 19. 小松原遺跡B地点 20. 小松原遺跡A地点
21. 米田遺跡 22. 平津遺跡 23. 竜山採石場跡

第3章 調査の成果

1. 確認調査の成果

確認調査は3回に分けて行い、合計14個のトレンチを設定し実施した。確認調査の結果、A～G地区の1,092m²の範囲で遺構が存在することが判明した。確認した遺構は柱穴・溝などで、出土した遺物から中世の集落跡である可能性が高いと予想された。本発掘調査地区のF・G地区の南側については集落関連の遺構は確認できなかったが、トレンチの断面で数面の水田土壤の痕跡が認められた。F・G地区の南側、120mあたりまでは、集落遺構検出面とほぼ同一の高さで、水田が営まれているが、さらに南側は、地山面が急に下がり土層断面の観察によれば6面の水田層を確認することができた。

本発掘調査区の南側は、中世集落に接して水田が広がっていたと考えられる。しかし水田土壤層の遺存状況は悪く、畦畔等の水田関連遺構は確認できなかったため、水田の調査は本発掘調査から除外し、集落部分の調査を実施することになった。

2. 全面調査の概要と基本層序

調査区の基本層序は、以下のとおりである。

盛土 I層（旧耕作土） II層（中世水田層） III層 遺構検出面

中世水田層は、調査区の全域に広がり、1面ないしは2面の水田土壤が確認されている。

中世の遺構はII層を除去したIII層上面で検出している。掘立柱建物跡等の集落関連遺構についても、II層中世水田層を除去した段階で検出しており、集落廃絶後は水田化したと理解できる。III層は、細砂～中砂で構成されるが、B区南西半とC地区は、砂礫層で構成される。

3. 遺構

調査の結果、A～C区にかけて、掘立柱建物・柱穴群・木棺墓・土坑などの集落関連遺構が集中して確認されている。調査区の南にあたるD区からG区にかけては、南北方向ないしは東西方向にはしる溝が纏まりをもった状況で検出されている。これらの溝群は、鋤跡の可能性が高く、畑ないしは水田の痕跡と理解している。

以下各区ごとに出土した遺構の概要を述べる。

A・B区の遺構

調査区の北東端に位置するA区は、下水・水道などの埋設物により調査を除外した部分を境にしてA1区・A2区に分かれる。

北端のA1区では、北東から南西方向にはしる幅50～80cm、深さ30cm前後の溝が5条確認された。

A2区からはA1区から続く溝や、木棺墓（SX001）が検出された。またA2区からB区北側にかけて、掘立柱建物跡（SB001）1棟を確認した。SB001の北側では、建物に帰属するかたちで、建物とは約2.7mの間をあけ北西～南東方向に並ぶ柵列（SA001）が確認された。

B区では多数の柱穴群が確認され、掘立柱建物が存在していたことは疑いのないところであるが、建

物として識別できなかった。調査区の南西側で柱穴が集中する場所が2箇所確認されている。

また調査区を横切るかたちで東西方向にはしる溝も検出されている。おそらく、地割りの機能をもつ溝と考えられる。溝は、調査区北東部のはば中央部を北西方向にはしり、幅30~60cmの規模をもつ。

この溝以外に、鋤の痕跡と考えられる溝群が確認されている。溝群は、調査区の南西側に位置し、北西方向にはしる溝群で構成される。溝幅は20~40cmである。溝群のうち南西端の溝については、他の溝に比べ深く、地割り溝の可能性も考えられる。

S B 0 0 1

A 2 区からB区北東部に位置する掘立柱建物である。建物の中央部は未調査部分、北東側は調査区外に及んでおり、全容は明らかではない。建物北東部の梁行き方向に沿って柵列がある。柵列と建物の間隔は2.7mである。桁行4間、梁行2間以上の総柱建物と想定される。規模は桁行きが10.6m、梁行きが5.4m以上である。建物を構成する柱穴は9個以上で、掘方の直径30~50cm、柱径20cm前後、深さは20~40cmと幅がある。棟軸方位はN40°Eを指す。遺物は柱穴内より土器の細片が出土している。

S A 0 0 1

A 2 区の中央部に位置し、SB001の北東側の梁行き方向と平行して検出された。建物との間隔は2.7mである。SB001の北東部を区切る柵列と考えられる。長さは5m以上である。柵列を構成する柱穴は3個検出し、大きさは掘方の直径20cm、柱穴径15cm、深さ20cmである。

遺物はP006より、土師器托(1)が出土している。

S K 0 0 1

B 1 区中央部西側より検出された土坑である。直径65cmの不整円形を呈する。遺物は土坑内より須恵器甕の胴部破片(4・5)が出土した。

S K 1 1 2

B区南西端に位置する土坑である。北東側の上部をSK115に切られている。長さ98cm、幅40cmの長方形を呈する土坑で、深さは30cmである。遺物は須恵器こね鉢(32)が出土した。

S K 1 0 5

B区の中央付近に位置する木棺墓である。墓坑の掘方は、長軸方向1.7m、短軸方向85cmの隅丸長方形を呈し、深さは6cmである。墓坑内には長さ1.5m、中央部の幅50cmの木棺を北東-南西方向に埋置している。木棺の主軸方位はN38°Eである。副葬品はなかった。

S X 0 0 1

A 2 区中央部付近南東側に位置する木棺墓である。墓坑の掘方は、長軸方向1.45m、短軸方向1.2mの楕円形を呈し、深さは8cmである。木棺は墓坑の中央に長さ89cm・中央幅47cmの小型の棺を北西-南東方向に埋置している。木棺の主軸方位はN45°Wである。

副葬品は、棺内より土師器皿(6~8)・須恵器椀(11)が納められていた。また墓坑内より須恵器甕片(9・10)が出土している。

C・D区の遺構

C区では柱穴群・土坑が検出された。柱穴群は調査区の北東半に集中しており、掘立柱建物跡が存在する可能性を示す。調査区が狭小なため、建物として識別できなかった。

D地区では、鋤溝・土坑が検出された。幅15~20cm・深さ5cm前後の小規模な溝群が北東方向にはしる。規模等から判断し鋤溝と考えられる。

E・F・G区の遺構

畠の痕跡と考えられる溝群と土坑（SK401）が検出された。溝群は、2方向確認された。E区の北東半部は幅60cm前後の溝が北東-南西方向にはしり、E区南西半部・F区・G区では同規模の溝が北西-南東方向にはしる。この溝の方向の違いは、畠の区画を示すものと考えられる。

SK401

土坑はE区北東隅で検出された。土坑の南東部は調査区外に及んでおり、全容は明らかではない。確認できる土坑部分は方形を呈し、北西辺は1.6mを測る。北東辺は80cm以上である。土坑内の埋土は炭・焼土で構成され、土坑底は赤化しており、被熱した状況を呈している。深さは10~20cmと浅い。

遺物は、鉄釘（M 8~11）が4点出土している。これ以外に骨片が採集された。鑑定の結果、人骨とは同定できなかったが哺乳類の焼骨であるとの鑑定結果である。鑑定結果は、第4章に掲載している。

小 結

調査の結果、A2区・B区・C区の3地区で掘立柱建物跡・地割溝等の集落関連遺構が検出された。各地区で確認された建物は、溝で区画されていた可能性が高く、規格性をもった地割りがなされていたと考えられる。またC区より南西側では畠ないしは水田が形成されている状況が今回の調査で明らかになった。さらに確認調査の結果を考慮するとF・G区より南西側15m離れた付近から急激に地形が下がり、そこには水田が展開している状況が明らかになった。集落付近は畠、集落から離れた部分に水田が営まれるという、中世村落の景観を復元できたことは今回の調査の大きな成果である。

4. 出土遺物

遺物は土器・瓦・石器・金属器があり、遺物の多くはB区の遺構より出土している。

土器は土師器・瓦器・須恵器・丹波焼・備前焼・中国製磁器がある。土師器は皿・托・土壙・羽釜などがあり、皿・土壙の出土が多い。瓦器は椀の細片が出土しているが、その量は極めて少ない。須恵器は、土師器に次いで多く出土している。椀・こね鉢・甕などが中心である。丹波焼は甕が10点あまり確認できた。しかし、胴部の細片が多く形状は不明である。備前焼は甕と播鉢が出土している。また丹波焼椀の可能性をもつもの（19）がある。

瓦は平瓦が少量出土している。また青磁碗・白磁碗など中国製磁器が少量出土している。

金属器は、土坑（SK401）を中心に鉄釘が多量に出土している。石器は、砥石が1点出土したのみである。以下出土遺物を概観する。

土師器

小皿・托・土壙・羽釜が出土している。

小皿は、B区木棺墓（SX001）の棺内より出土した（7）、SK104の（55・56）は、12世紀代の特徴をもつ。SX002の（12）は13世紀代におさまる。土師皿のなかでもB区SK113・SK120・SK130の土坑から出土した（33）・（39）・（42）の一群は14世紀から15世紀に比定される。

（1）はSA001より出土した托である。

土壙は12点ある。B区SX103・106・107の遺構や包含層より出土している。（15・30・54・61・79・82・83）の一群は、口縁部が大きく外傾し、端部が外方に拡張する特徴と、外面に斜位のタタキが残る壙である。播磨地域を中心に丹波地域にかけて出土例が多い壙である。83は固く焼き締まり、赤味の強い発色を呈しており、丹波焼の可能性がある。時期的には12世紀末から14世紀におさまると理解される。

(81・105・106・107) の一群は、口縁部が短く内傾し、口縁部と胴部の境に断面三角形の凸帯を貼り付けた壺である。時期的には14世紀から15世紀前半に比定される。(80) は口縁部が「く」字に屈曲し、端部が内側に丸くおさまる壺である。14世紀末から15世紀前半に比定される。(47・97) はSX101と包含層より出土した羽釜である。

須恵器・国産陶器

須恵器はこね鉢・椀・甕が出土している。多くが東播系須恵器の範疇におさまる。しかしB区SK112の甕(32)は、外面胴部にヘラ整形が丁寧に施されるなどの特徴から備前焼甕と考えられる。

こね鉢は須恵器のなかでは圧倒的に出土量が多く、A区ではSD001と包含層、B区ではSD103、SK106・112・115・120やSX101・106と包含層、C・D区は包含層より出土している。形状のわかるものは16点ある。口縁の形状から、これらのこね鉢は12世紀中頃から14世紀代におさまる。椀は、A・B区を中心に出土している。A区SD006・007、SX001と包含層、B区はSK120・138、SX101・104、これ以外にF区SD505より出土している。おおむね12世紀中頃から13世紀の範疇におさまる。

椀(19)は、丹波焼と考えられる。甕は多くが東播系須恵器であるが、(32)の甕は備前焼の範疇で捉えられる。時期的には鎌倉時代後半の14世紀前半と考えられる。これ以外に備前焼は搔鉢(109)がE区包含層より出土している。

瓦は細片を含めると7点出土し、すべて平瓦である。図化できたのはC区包含層より出土した(101)のみである。

中国製磁器は、白磁・青磁の碗が13点出土している。遺構に伴うのは、B区SX101上面より白磁碗が1点出土のみである。

以上、主な土器についてその概要を述べた。これ以外に弥生土器と奈良時代の杯が出土しているが、遺構に帰属するものではない。出土した土器からみた遺跡の年代は、およそ12世紀中頃から15世紀前半頃と理解している。

従前より、加古川中流域加東市の中世集落遺跡から丹波焼が出土することは知られていた。今回の調査で加古川下流域にあたる本遺跡で丹波焼が出土したことは、中世丹波焼が加古川の舟運によって運ばれていたことを想起させるとともに、加古川中・下流域が丹波焼の消費地であったことを示している。さらに、丹波焼とともに鎌倉時代後半の備前焼が出土していることは特筆される。

参考文献

- 中世土器研究会編 『概説 中世土器・陶磁器』 真陽社 1997
宮原文隆他 『門前・上山遺跡』 中町教育委員会 1992
中川 渉 「中世の土器」『玉津田中遺跡』 第6分冊(総括編) 兵庫県教育委員会 1996

出土遺物観察表

表1 土器観察表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			残存状況			出土地区	出土清掃	層位
					口径	器高	底径	口縁	底	他			
1	10	8	土師器	托	—	(1.8)	(6.0)	—	1/5	底部	A 2	P008	
2	10	8	須恵器	碗	—	(2.0)	—	わずか			A 1	SD008a,b	上層
3	10	8	須恵器	碗	—	(1.8)	—	わずか			A 1	SD007	
4	10		須恵器	甕	—	(10.0)	—			体破片	A 2	SK001 (SD001上層)	
5	10		須恵器	甕	—	(18.0)	—			体わずか	A 2	SK001	
6	10	8	土師器	小皿	(9.3)	1.5	—		1/8		A 2	SX001	館内
7	10	8	土師器	皿	(11.7)	(1.3)	—	1/10			A 2	SX001	
8	10	8	土師器	皿	(12.7)	(2.2)	—	1/8			A 2	SX001	
9	10	8	須恵器	甕	—	(8.0)	—			体破片	A 2	SX001	
10	10	8	須恵器	甕	—	(4.1)	—			体破片	A 2	SX001	
11	10	7	土師器	碗	(16.6)	6.0	(7.6)	1/5			A 2	SX001	
12	10	7	土師器	皿	(14.7)	2.5	(9.2)	1/3			A 2	SX002	
13	10	7	須恵器	碗	(15.6)	4.0	(3.5)	1/5			A 2	SX003	
14	10	8	須恵器	碗	—	(3.2)	—	わずか		口縁	A 2	精査中	II層
15	10	8	土師器	土壙	—	(3.2)	—	わずか		口縁	A 2	精査中	II層
16	10	8	須恵器	碗	—	(1.8)	—	わずか		口縁	A 1		II層
17	10	8	須恵器	碗	—	(2.6)	—	1/10		口縁	A 2	SX001	
18	10	8	須恵器	碗	—	(1.9)	—	1/10		口縁	A 1		II層
19	10	8	丹波焼	椀	—	(1.1)	(6.3)		1/4層	底部	A 1		II層
20	10	8	須恵器	こね鉢	—	(3.4)	—	わずか		口縁	A 2	精査中	II層
21	10	8	須恵器	鉢	—	(2.6)	—	わずか		口縁	A 1		II層
22	10	8	須恵器	甕	—	(2.4)	—	わずか		口縁	A 2		II層
23	10	8	白磁	碗	—	(1.6)	—	わずか		口縁	A 1		II層
24	10		土師器	小皿	(10.2)	1.2	—	1/10			B 4	P128	
25	10	8	須恵器	こね鉢	—	(4.3)	—	わずか		口縁	A 2	SD001	
26	10		須恵器	こね鉢	—	(2.7)	—	わずか		口縁	B 1	SD103	
27	10		須恵器	甕	—	(1.9)	—	わずか		口縁	B 1	SD103	
28	10	7	須恵器	椀	15.4	4.9	7.4	4/5			B 1	SD105	
29	10	9	須恵器	こね鉢	—	(4.9)	—	わずか		口縁	B 2	SK106	
30	10	8	土師器	土壙	(20.1)	(2.5)	—	1/9		口縁	B 2	SK107	
31	10	9	須恵器	こね鉢	(30.2)	(9.1)	—	1/12			B 4	SK112	
32	11	7	備前焼	甕	—	(6.8)	—			瓶部	B 4	SK122	
33	12	9	土師器	小皿	(12.8)	(2.4)	—	1/8			B 4	SK113	
34	12	9	土師器	小皿	(11.3)	2.8	(7.9)	わずか	1/3		B 4	SK115	
35	12	9	須恵器	こね鉢	—	(3.5)	—	わずか			B 4	SK115	
36	12	9	須恵器	こね鉢	—	(4.6)	—	わずか			B 4	SK115	
37	12	9	土師器	小皿	(7.3)	1.0	—			1/2瓶	B 4	SK116	
38	12		須恵器	甕	—	(9.1)	—			体破片	B 4	SK117	
39	12	9	土師器	小皿	(11.4)	2.3	(7.0)	1/8			B 4	SK120	
40	12	9	須恵器	椀	—	(1.5)	(6.0)	1/4		底部	B 4	SK120	
41	12	9	須恵器	こね鉢	(27.5)	(4.4)	—	1/10			B 4	SK120	
42	12	8	土師器	小皿	6.6	1.5	—	わずか			B 3	SK130	
43	12	8	土師器	杯	(12.7)	2.2	(8.7)	1/10			B 3	SK130	
44	12	9	須恵器	椀	—	(1.3)	(6.6)		1/4	底部	B 3	SK138	
45	12	8	土師器	甕	(21.1)	(6.6)	—	1/12			B 3	SK138	
46	12	8	土師器	皿	—	(2.0)	—	1/12			B 1	SX101	
47	12	8	土師器	羽釜	—	(5.0)	—			破片	B 1	SX101	
48	12		須恵器	椀	—	(2.6)	—	1/10			B 1	SX101	
49	12		須恵器	こね鉢	—	(4.9)	—	わずか		口縁	B 1	SX101	
50	12		須恵器	こね鉢	—	(2.7)	—	わずか		口縁	B 1	SX101	
51	12		白磁	椀	(14.4)	(3.6)	—	1/8			B 1	SX101	上面
52	12	8	土師器	皿	—	(1.6)	—	1/12			B 3	SX108	
53	12	8	土師器	小皿	(6.9)	1.3	—			1/4	B 2	SX103	
54	12	8	土師器	土壙	—	(5.0)	—	わずか			B 2	SX103	
55	12	7	土師器	小皿	(7.8)	1.2	(6.5)	1/4	1/3		B 1	SX104	
56	12	7	土師器	小皿	(9.0)	10.4	(8.6)	1/4			B 1	SX104	
57	12	8	土師器	小皿	(11.8)	(2.8)	—	1/8			B 1	SK104	
58	12		須恵器	椀	(14.4)	(2.4)	—	1/7			B 1	SX104	
59	12		須恵器	椀	—	(2.0)	(6.0)		3/5		B 1	SX104	
60	12	10	須恵器	こね鉢	—	(3.9)	—	わずか			B 3・4	SX106	
61	12	9	土師器	土壙	(18.2)	(5.2)	—	1/7			B 3・4	SX106	
62	12		土師器	土壙	—	(8.8)	腹径(26.7)			腹1/4	B 2	SX106	上面
63	13		土師器	小皿	(7.7)	1.0	—	1/10			B 3	SX108	
64	13		土師器	小皿	(8.8)	1.5	—	1/6			B 3	SX108	
65	13	8	土師器	小皿	—	(2.9)	—	1/10			B 3	SX108アセ	
66	13	8	土師器	小皿	—	(1.8)	—	わずか			B 3	SX109	
67	13	8	土師器	小皿	(8.8)	1.5	—	1/3			B 3	SX109	
68	13	8	土師器	小皿	—	(2.0)	—	わずか			B 3	SX109	
69	13	9	須恵器	こね鉢	—	(4.0)	—	わずか			B 3	SX109	
70	13	8	土師器	小皿	(14.2)	(2.2)	—	1/5			B 3	SX109	
71	13	10	土師器	甕	(13.9)	(3.2)	—	1/6			B 3		
72	13	10	土師器	小皿	(12.7)	(1.6)	—	1/8		口縁	B 4	包含層	II層
73	13	10	土師器	小皿	(11.7)	(2.3)	—	1/10			B 1		
74	13	10	土師器	小皿	(10.7)	(2.4)	—	1/7			B 4	包含層	II層
75	13	7	土師器	小皿	(13.1)	2.9	—	1/5			B 4	包含層	II層
76	13	10	土師器	小皿	—	(2.2)	(9.2)	1/7			B 3	包含層	II層
77	13	10	須恵器	杯	—	(2.4)	(10.6)		1/6	底部	B 1		II層
78	13	10	須恵器	椀	—	(2.0)	(6.1)		7/8	底部	B 1		II層
79	13	10	土師器	土壙	(15.9)	(2.8)	—	1/8			B 3		
80	13	10	土師器	土壙	(22.7)	(4.6)	—	1/12			B 1		
81	13	10	土師器	土壙	—	(3.4)	—	わずか			B 1		
82	13	8	土師器	土壙	—	(4.5)	—	わずか			B 2		
83	13	10	丹波焼	土壙	—	(4.8)	—	わずか			B 3	包含層	II層
84	13	9	須恵器	こね鉢	—	(2.4)	—	わずか		口縁	B 2	東側削溝	III層
85	13	10	須恵器	こね鉢	—	(4.2)	—	わずか			B 3	包含層	II層
86	13	10	須恵器	こね鉢	—	(3.7)	—	わずか			B 3	包含層	II層
87	13	10	須恵器	こね鉢	—	(2.6)	—	わずか			B 4	包含層	II層

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)				残存状況			出土地区	出土遺構	層位
					口径	高さ	底径	口縁	底	他				
88	13	10	須恵器	こね鉢	—	(2.2)	—	わすか			B 4	包含層	II層	
89	13	9	須恵器	こね鉢	—	(3.9)	—	わすか		口縁	B 2		II層	
90	13	10	須恵器	こね鉢	—	(4.3)	—	わすか			B 4	包含層	II層	
91	13	10	須恵器	こね鉢	—	(2.1)	—	わすか		口縁	B 1		II層	
92	13	9	須恵器	こね鉢	—	(3.2)	—	わすか			B 2		II層	
93	13	10	須恵器	こね鉢	—	(3.5)	—	わすか			B 3		II層	
94	13	10	須恵器	甕	—	(6.2)	—	わすか		口縁	B 3		II層	
95	13	9	須恵器	甕	—	(8.9)	—			体破片	B 2		II層	
96	13	10	青磁	碗	—	(4.4)	—	わすか			B 3		II層	
97	14	11	土師器	羽釜	—	(4.4)	—			体破片	C	遺構精査中	II層	
98	14	11	須恵器	こね鉢	—	(3.5)	—	わすか			C	遺構精査中	II層	
99	14	11	須恵器	甕	—	(5.8)	—			体破片	C	遺構精査中	II層	
100	14	11	須恵器	甕	—	(6.2)	—			体破片	C	II層		
101	14	7	瓦	平瓦 タテ(11.0)ヨコ(7.5)	—					破片	C	遺構精査中	II層	
102	14	11	須恵器	こね鉢	—	(2.7)	—	1/12			D		I + II層	
103	14	11	須恵器	こね鉢	(30.5)	(3.2)	—	1/12			D		I + II層	
104	14	12	白磁	小皿	—	(0.8)	(5.7)		のみ	底部	E 3	SD440		
105	14	11	土師器	土壇	—	(3.6)	—	わすか			E 2		II層	
106	14	11	土師器	土壇	—	(4.0)	—	わすか			E 3		II層	
107	14	11	土師器	土壇	—	(3.6)	—	わすか			E 3		I + II層	
108	14	11	須恵器	こね鉢	—	(3.6)	—	わすか		口縁	E 2		II層	
109	14	11	備前	環鉢	—	(3.5)	—		わすか		E 3		I + II層	
110	14	12	青磁	碗	(12.1)	(2.3)	—	1/8		口縁	E 4 + 5		I + II層	
111	14	12	白磁	小皿	(9.8)	(1.9)	—	1/8		口縁	E 4 + 5		I + II層	
112	14	須恵器	甕	—	(1.8)	(5.7)	—	わすか	底部	F区	SD605			
113	—	8									A 1		II層	
114	—	8	丹波								A 1		II層	
115	—	9	丹波								B 3	SX111		
116	—	9	丹波								B 3	SK125		
117	—	9	青磁								B 3	SK138		
118	—	9	白磁								B 4	SK113		
119	—	10	七輪器								B 4	包含層	II層	
120	—	10	青磁								B 4	包含層	II層	
121	—	10	青磁								B 4	包含層	II層	
122	—	10	丹波								B 3	包含層	II層	
123	—	10	繩								B 3	包含層	II層	
124	—	11	須恵器								E 3	SD438		
125	—	11	須恵器								E 3		I + II層	
126	—	11	丹波								E 3		I + II層	
127	—	11	丹波								E 3		I + II層	
128	—	11	丹波								E 4 + 5		I + II層	
129	—	11	丹波								E 3		I + II層	
130	—	11	丹波								E 3		I + II層	
131	—	12	白磁	碗							E 1	SD417		
132	—	12	青磁	碗							E 3		I + II層	

表2 石製品

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)				出土地区	出土遺構	層位
					長さ	幅	厚み	重量			
S 1	12	9	石	砥石	7.5	3.8	1.75	79.31	B 3 + 4	SX106	

表3 金属製品

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)				出土地区	出土遺構	層位
					長さ	幅	厚み	重量			
M 1	10	13	鉄	釘	(4.7)	0.6	0.4	2.07	A 1		II層
M 2	13	13	鉄	釘	(5.9)	0.7	0.5	3.24	B 3	SX108	
M 3	13	13	鉄	釘	(6.6)	1.3	1.2	7.45	B 3	SX108	
M 4	13	13	鉄	釘	(5.2)	0.9	0.8	3.99	B 3	包含層	II層
M 5	13	13	鉄	釘	(2.7)	0.8	0.5	0.89	B 3	遺構面精査中	II層
M 6	13	13	鉄	釘	6.0	1.5	0.7	2.77	B 4	遺構面精査中	II層
M 7	14	13	鉄	釘	(6.3)	0.9	1.1	6.19	C	遺構精査中	II層
M 8	14	13	鉄	釘	3.9	0.6	0.4	0.68	E 2	SK401	
M 9	14	13	鉄	釘	4.1	0.7	0.4	0.92	E 2	SK401	
M 10	14	13	鉄	釘	3.5	0.6	0.4	0.85	E 2	SK401	
M 11	14	13	鉄	釘	6.4	0.7	0.4	1.82	E 2	SK401	
M 12	14	13	鉄	釘	(3.6)	0.7	0.5	1.91	E 2		II層
M 13	14	13	鉄	釘	2.7	0.9	0.6	2.27	E 2		II層
M 14	12	13	鉄	鉄鑓	(12.9)	0.8	1.0	11.20	B 4	SX106	

第4章 粟津大年遺跡

出土の動物遺体

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

樋泉 岳二（早稲田大学）

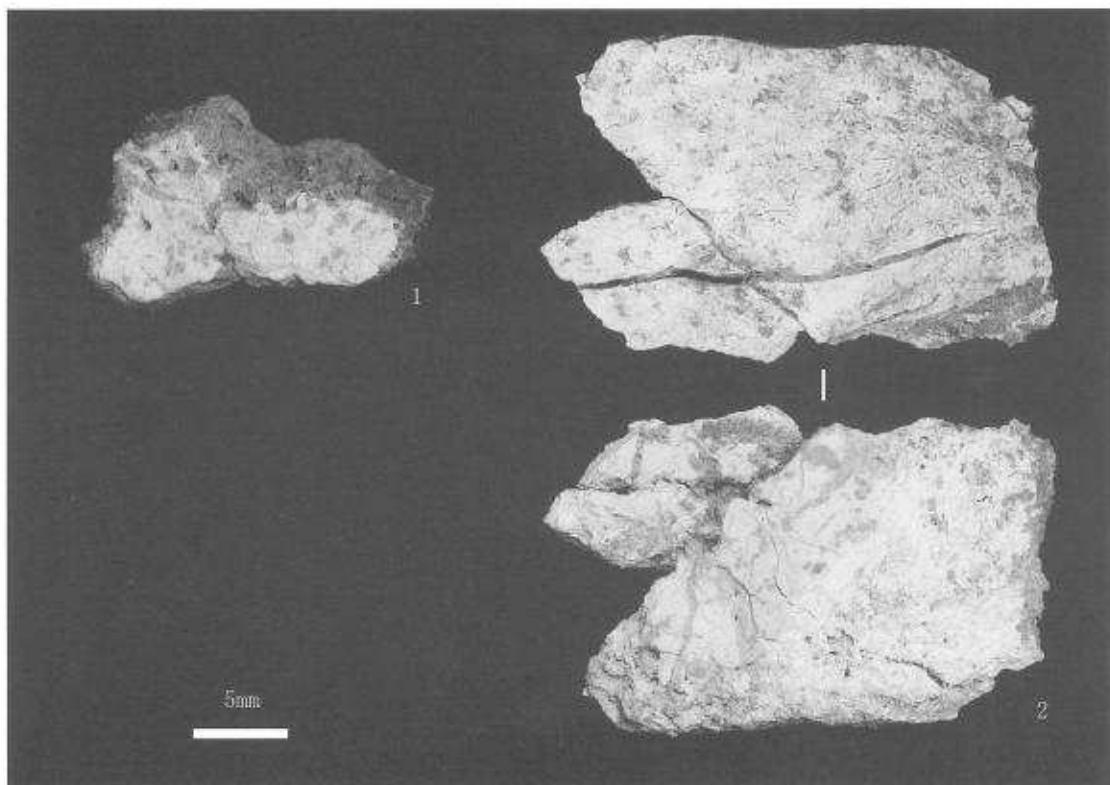
1. はじめに

兵庫県加古川市粟津大年遺跡の発掘調査において、平安時代末～室町時代前半と推定される土坑SK401から焼けた骨片が検出された。ここではその同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料はSK401より出土した焼骨片2点である。SK401では被熱の痕跡が見られることから、火が焚かれたことが推定されている。また、釘が出土していることから箱など木製の容器が収められていたことが推定されている。

骨は発掘調査時に土ごと取り上げられ、乾燥状態で保管されていた。骨のクリーニングを行った後、篩を用いて1mm以上の骨片を回収し、同定の対象とした。



第2図 粟津大年遺跡の動物遺体

3. 結果と考察

2点の試料はいずれも哺乳類の骨片で、強い火熱を受けて白色の焼骨と化している。

試料1は小破片のため種・部位の判定は困難である。

試料2はおそらく頭蓋骨の一部と思われる扁平骨の破片であるが、やはり小破片のため種の判定は困難である。ただし、骨の厚さや骨質からみて、人骨の可能性は低いように思われる。

表4 粟津大年遺跡から採集された動物遺体の同定結果

遺構	試料No.	種類	部位	残存状態	数	備考
SK401	1	哺乳類・ 種同定不可	不明	破片	1	焼骨
	2	哺乳類・ 種同定不可	頭蓋骨?	破片	1	焼骨

4. まとめ

粟津大年遺跡の土坑SK401（平安時代末～室町時代前半）において、哺乳類の焼骨片の出土が確認された。SK401では焚き火の痕跡が認められたことであり、土坑中に含まれていた骨が焚き火の際に被熱・焼骨化したのではないかと推測される。

第5章 結語

調査の結果、A 2区・B区・C区の3地区で掘立柱建物跡・地割溝等の集落関連遺構が検出された。調査区が狭小なため、建物として識別できたのはA 2区・B区にまたがって検出した掘立柱建物SB001のみである。

建物の南西側には梁行に沿って溝が確認された。この溝は屋敷地を区画する機能をもつと理解できる。この建物に隣接したB区南西半部からC地区にも柱穴群がみられ、ここにも建物が存在している。柱穴群は密集しており、同じ場所で幾度かの立て替えが行われた可能性が高い。

また建物に近接して「屋敷墓」と考えられる木棺墓が2基確認されている。屋敷墓は、零細小農民（下層農民）あるいは中流農民といった百姓層の建物に付属することが多いと考えられている（橋田1991）。この考えに従えば、今回発見された建物群は、百姓層の建物の可能性があることも視野にいれる必要がある。

またD区からE 2区の北東半にかけて、溝が並んで北東—南西方向に規則的に並んでいる状況が見られる。この溝群は間隔が密で水田耕作により生じたものとは考えにくく、畠の存在を想起することができる。溝はE 2区南西半部より向きがかわり北西—南東方向にはしるが、密集はしていない。溝は2から3本単位で間隔をおいてならんでおり、D区からE 2区の北東半の状況とは異なる。E 2区南西半部より南西側の状況は水田の部分と理解したい。

粟津大年遺跡の存続時期は、出土土器からおよそ12世紀中頃から15世紀前半頃と考えられる。今回の調査で出土した土器について言及すると、12世紀中頃から13世紀にかけては、在地の土師器・土壙をはじめ東播磨系須恵器のこね鉢・甕が出土土器の主力を占める。後半期には東播磨系須恵器が姿を消し、14世紀前半には備前焼甕の流入が確認された。

調査成果から粟津大年遺跡の中世村落景観は、加古川東岸域の自然堤防上に築かれた村で、掘立柱建物で構成されている。村の南西側は緩やかに傾斜し、建物に接して畠がつくられ、さらに確認調査の結果を考慮するとTr 3付近で急激に地形が下がり、そこには水田が展開している状況が明らかになった。

集落付近は畠、集落から離れた部分に水田が営まれるという、中世村落の景観の一端を復原できたことは今回の調査の大きな成果である。

中世の粟津地区は、賀古庄に属し、その支配は武藏国より地頭として赴任した越生氏に始まると言われている。しかしながらその実態は明らかではなく、今回の調査によって、中世賀古庄の一端を明らかにすることことができた。

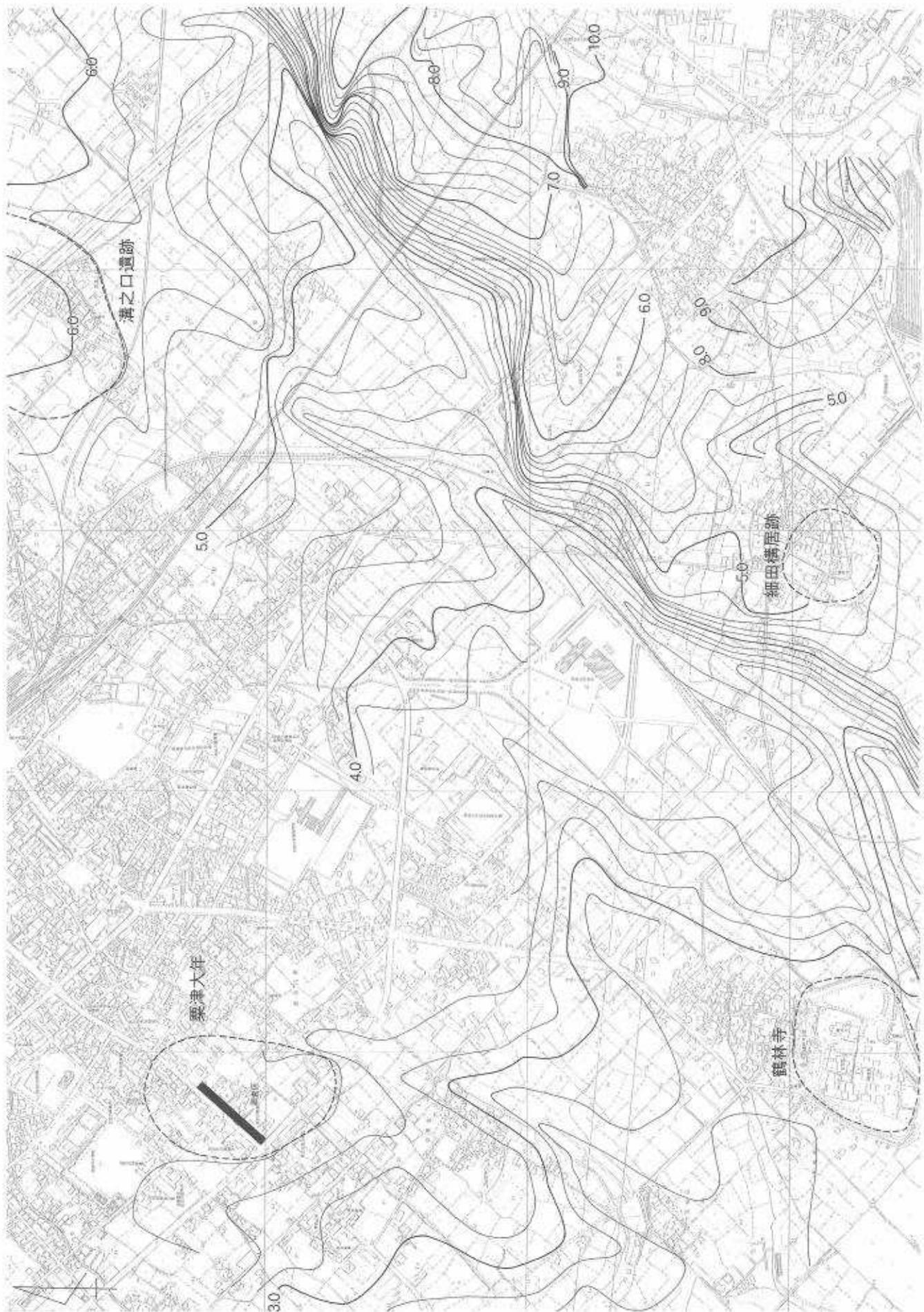
注)

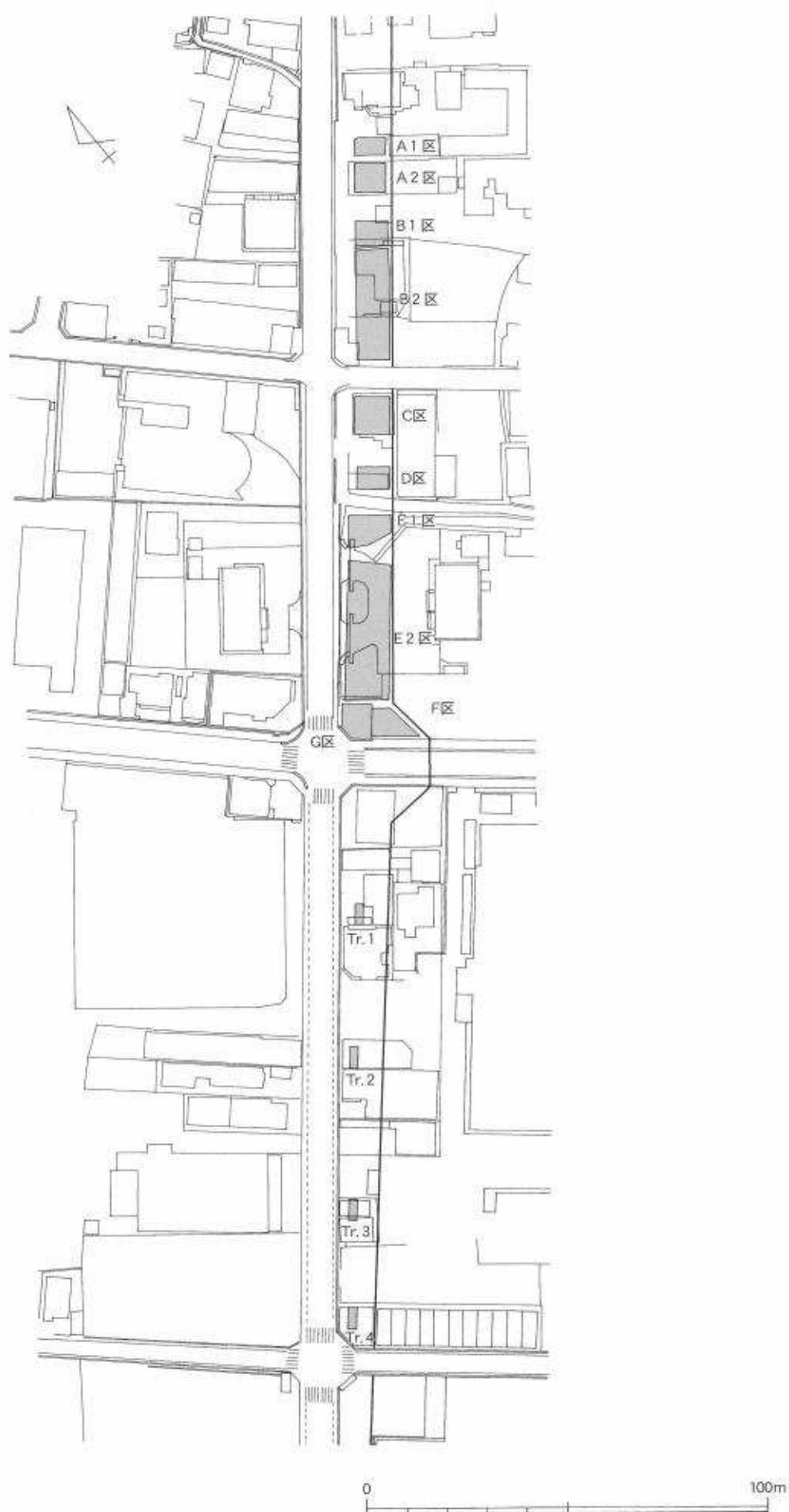
橋田正徳「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会 1991

報告書抄録

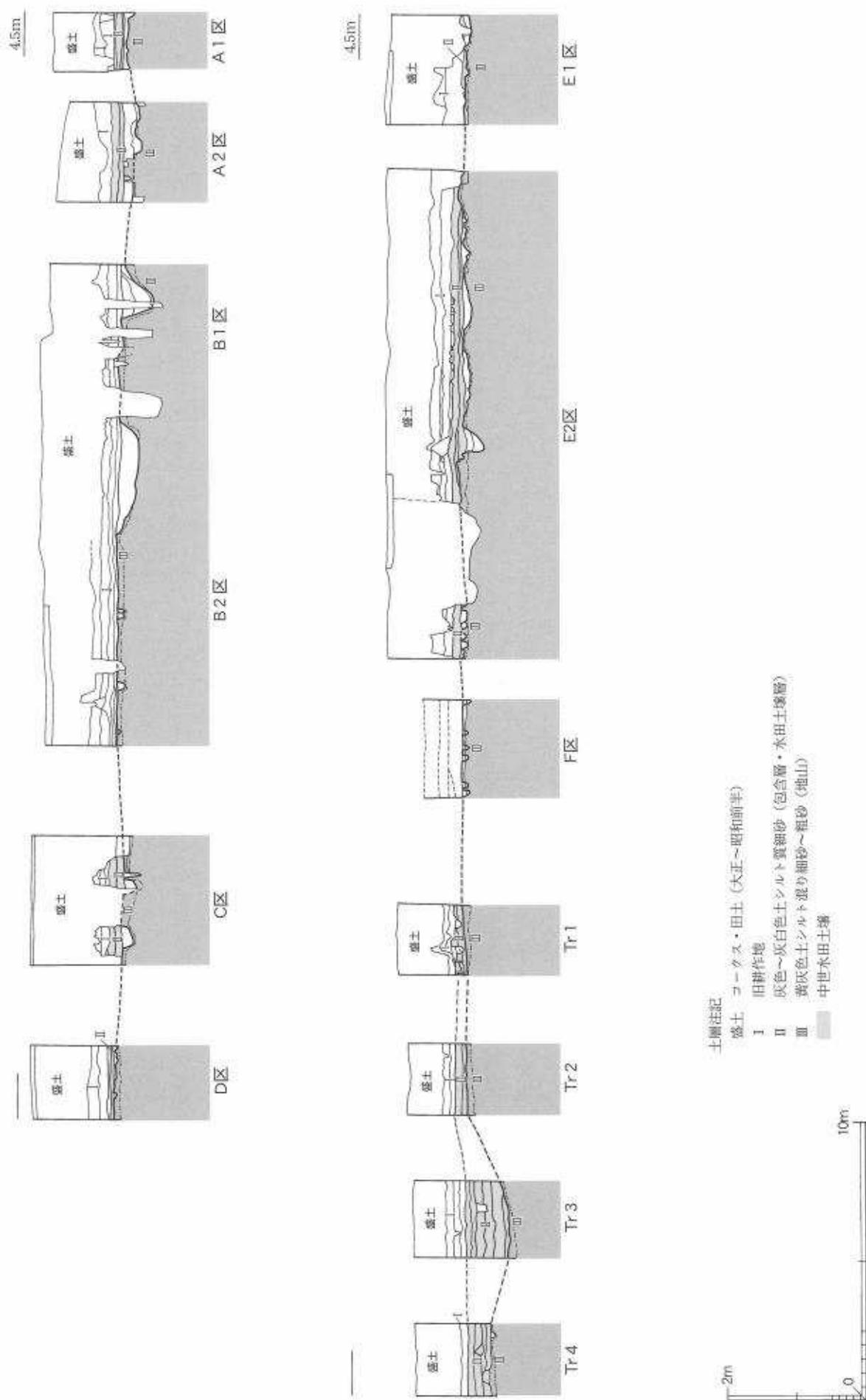
ふりがな	あわづおおとしいせき							
書名	粟津大年遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第348冊							
編著者名	村上泰樹							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500番地 TEL 079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号							
発行年月日	西暦2009年3月23日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
あわづおおとしいせき 粟津大年遺跡	ひょうごけん かこ かわし 兵庫県加古川市 かこ こがわいとわしき 加古川町粟津	28210	2004174 2004205 2004209 2005064 2005063	34° 45' 46. 7"	134° 49' 54" 54"	2004. 6. 17 ~ 23 2004. 9. 1 ~ 2 2004. 8. 31 ~ 9. 15 2005. 5 ~ 8 2005. 5. 25 ~ 8. 12	38.9m ² 53m ² 19m ² 40m ² 1,039m ²	加古川別 府港線緊 急街路整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
あわづおおとしいせき 粟津大年遺跡	集落跡	平安～室町	掘立柱建物、木棺墓、土坑	東播系須恵器、備前焼、丹波焼			加古川下流域の 中世村落遺跡	

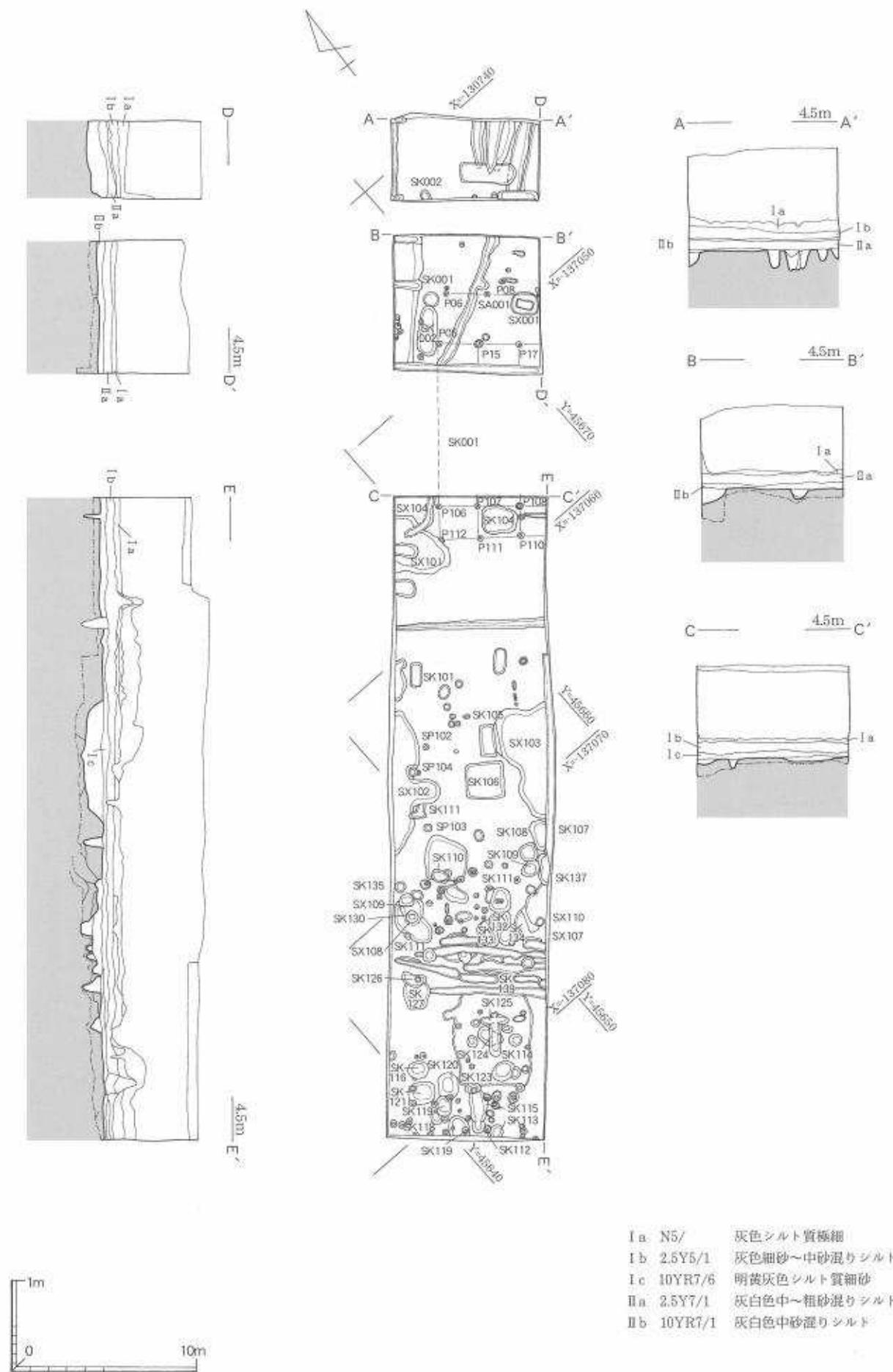
図版



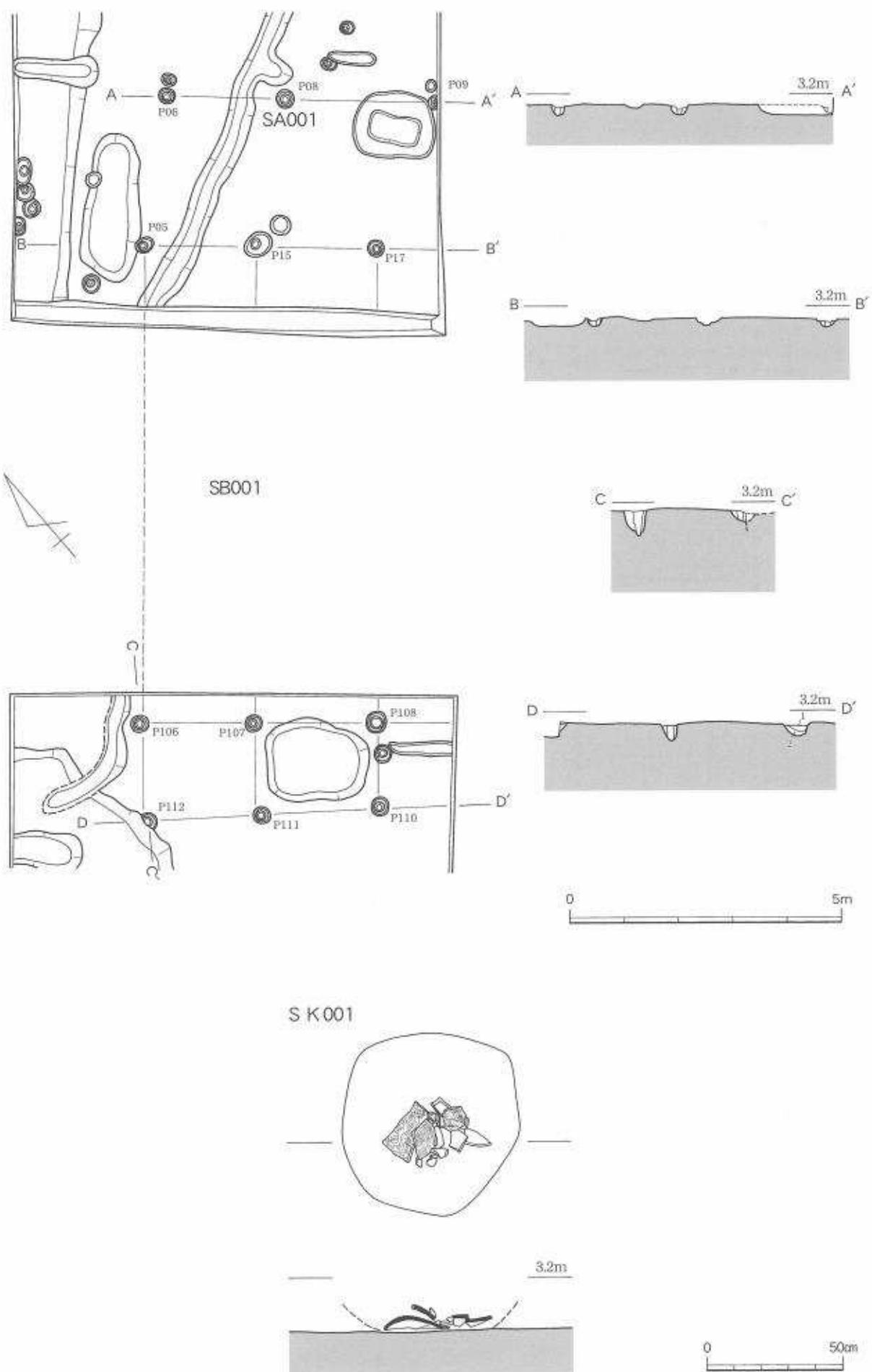


調査区位置図

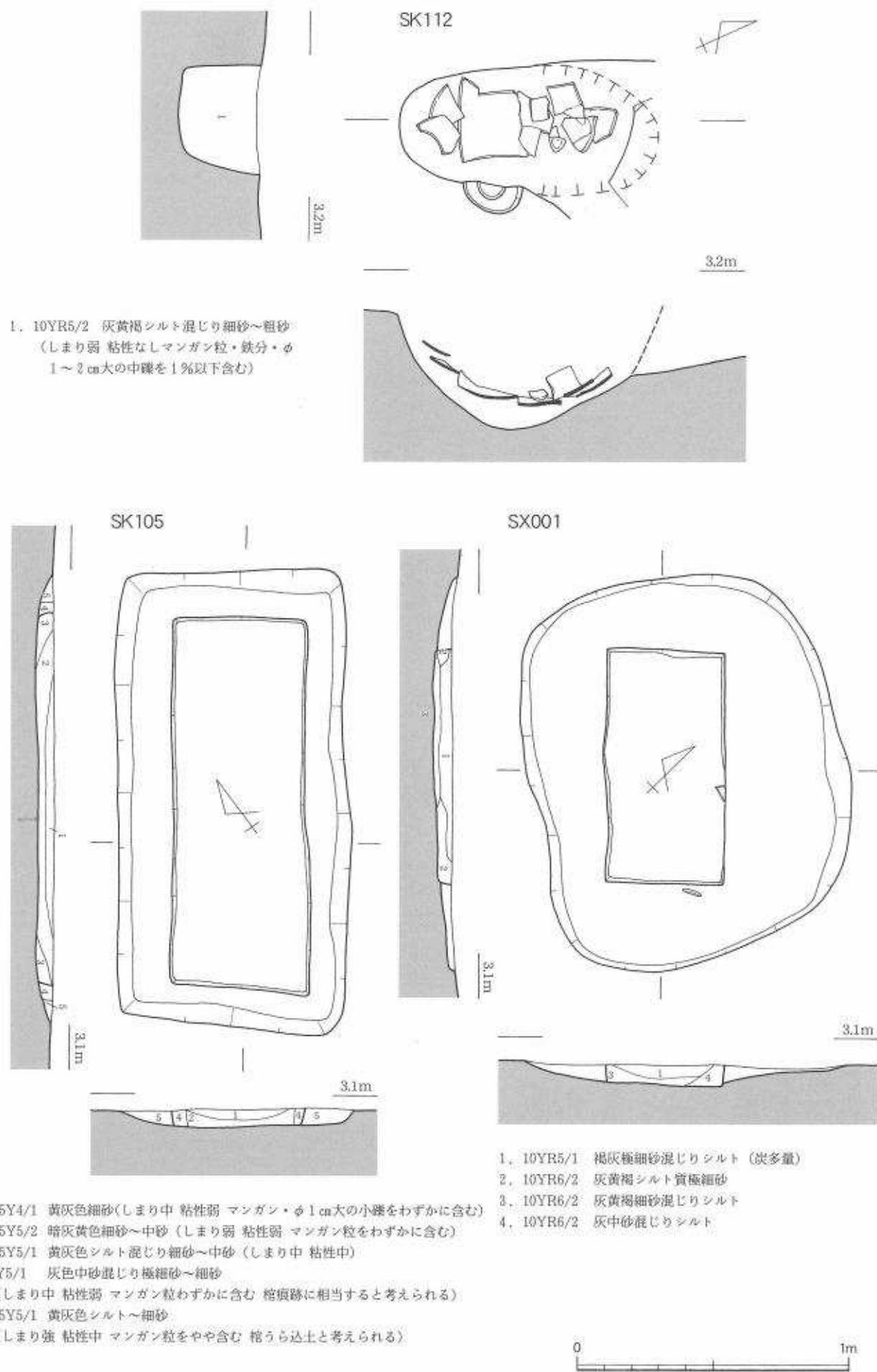




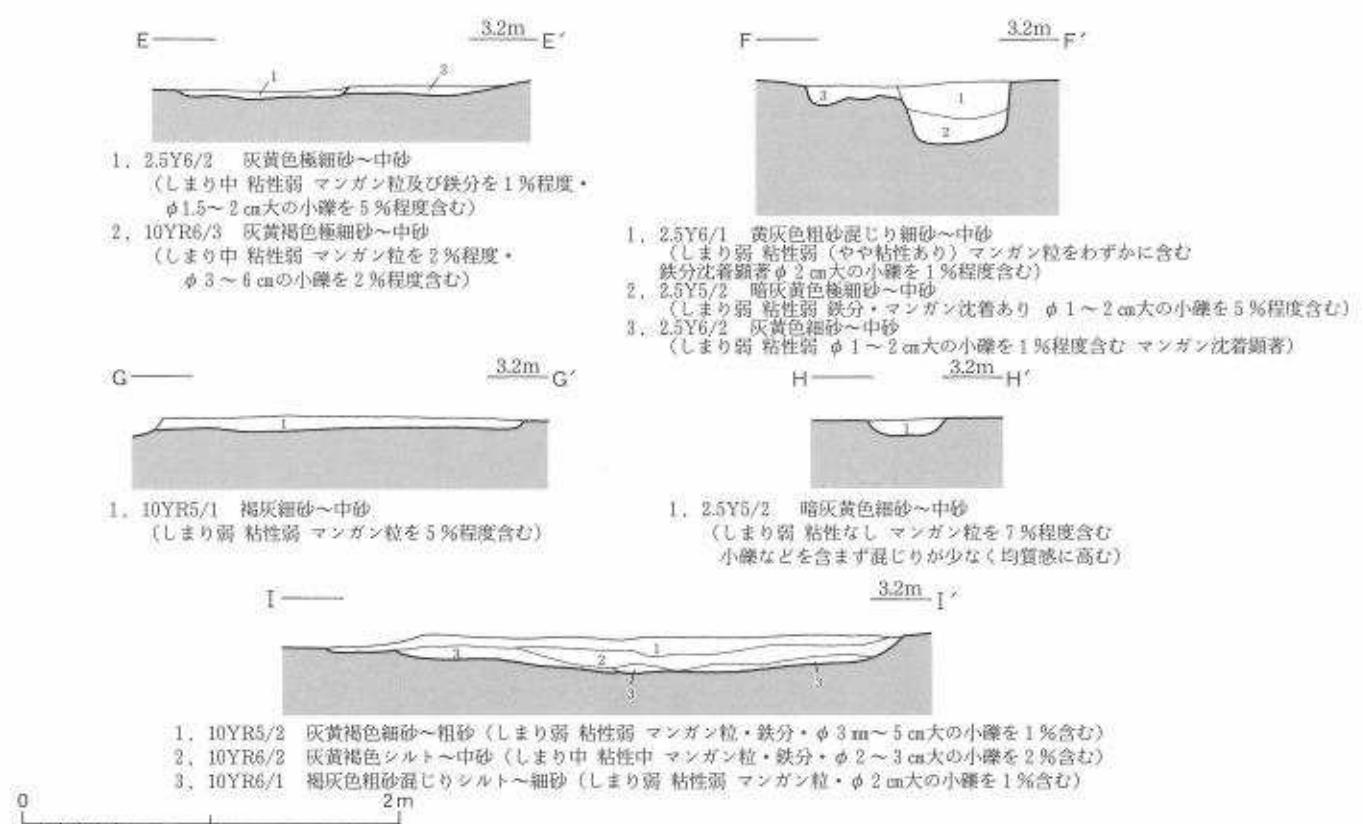
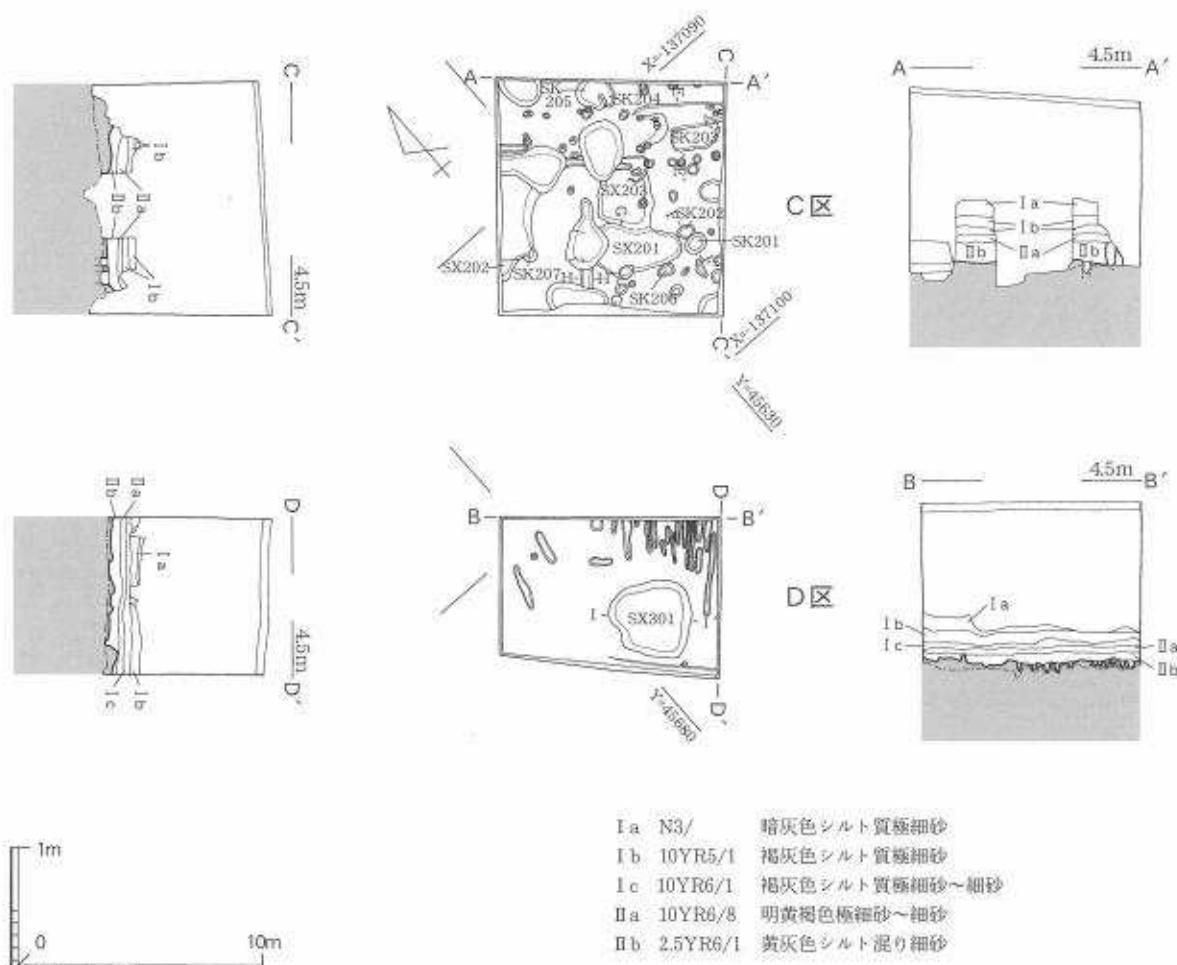
A・B区 遺構全体図



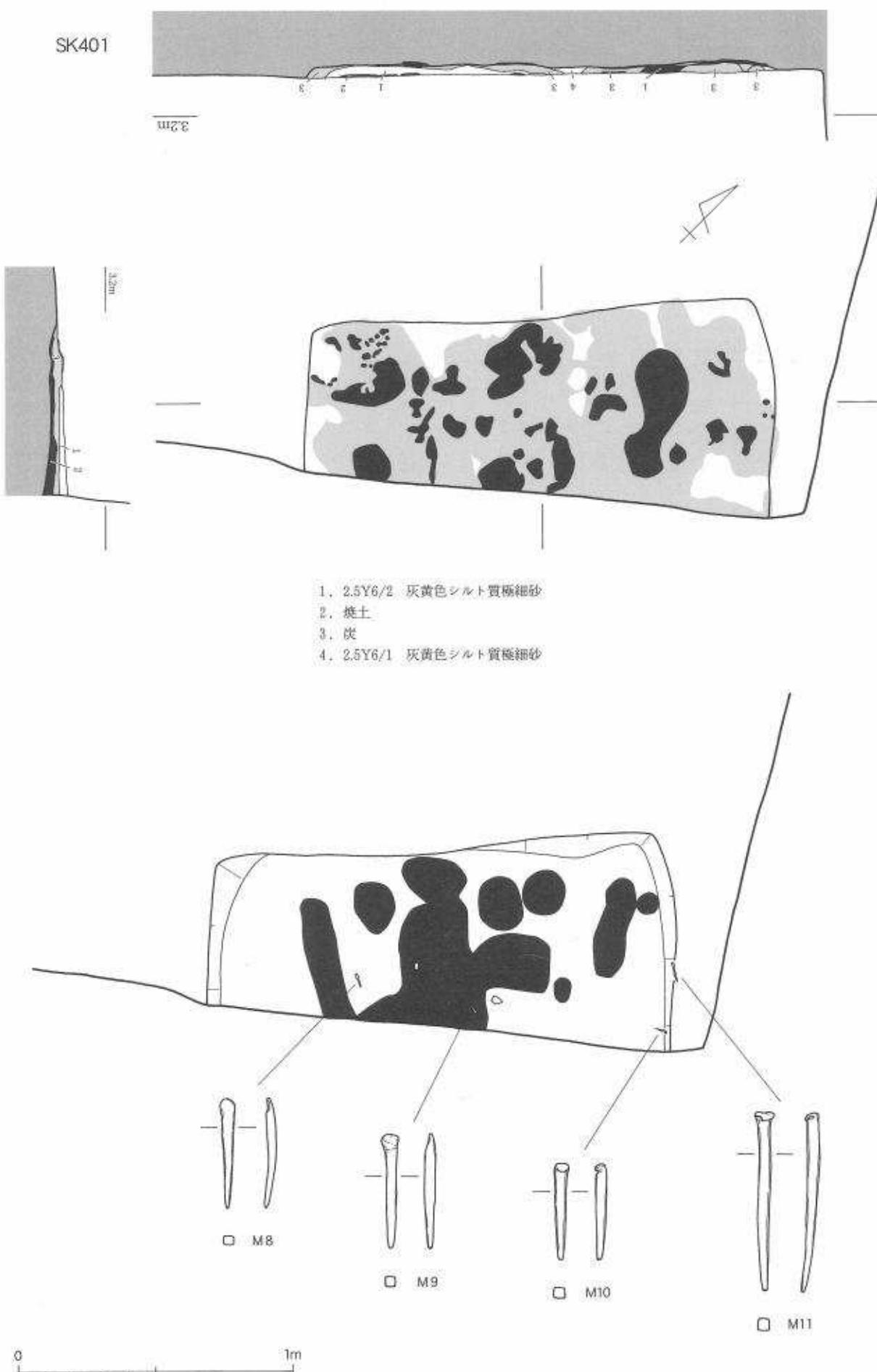
A・B区 通構平面図 (1)



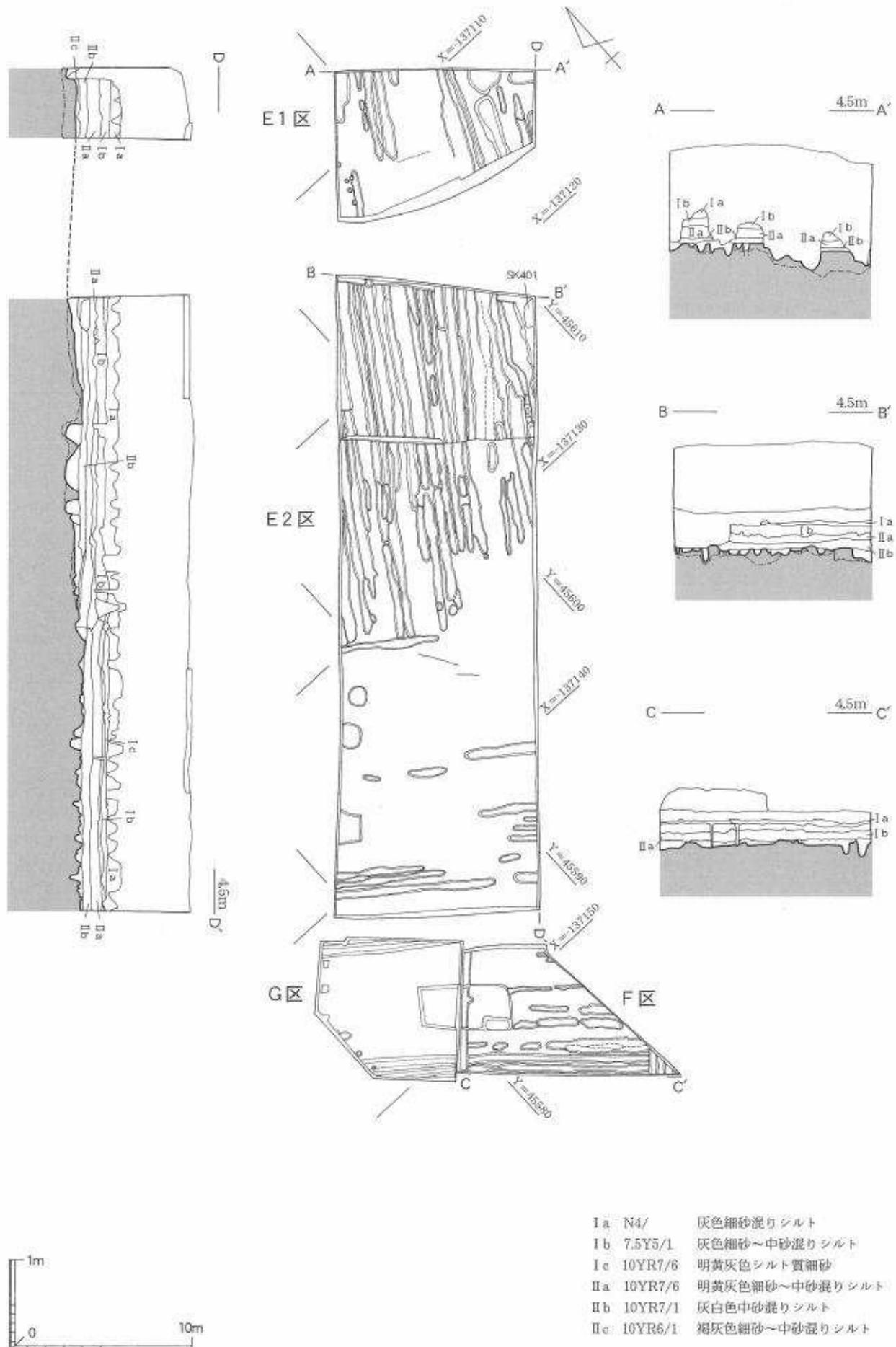
A・B区 遺構平面図（2）



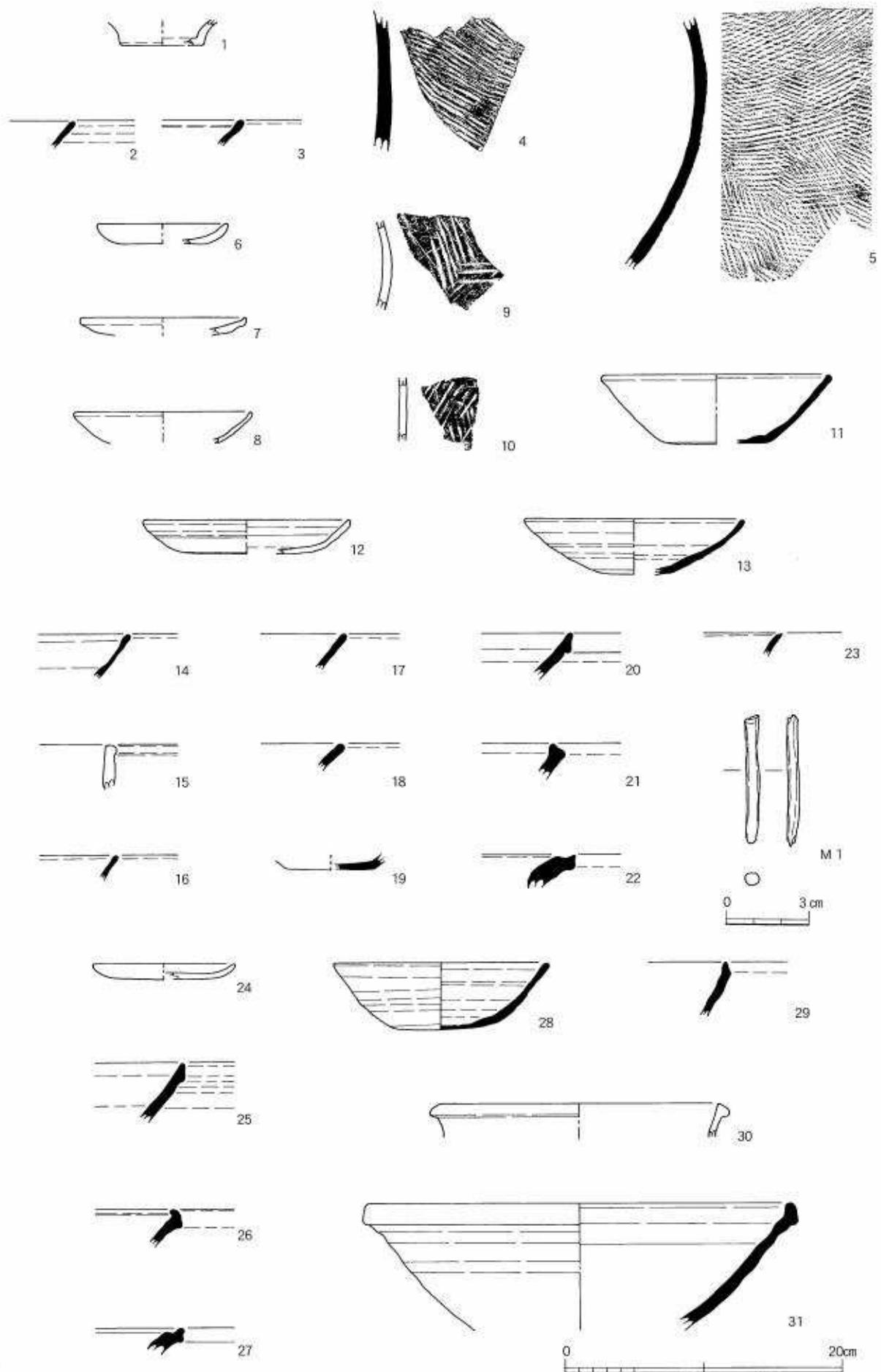
C・D区 遺構全体図



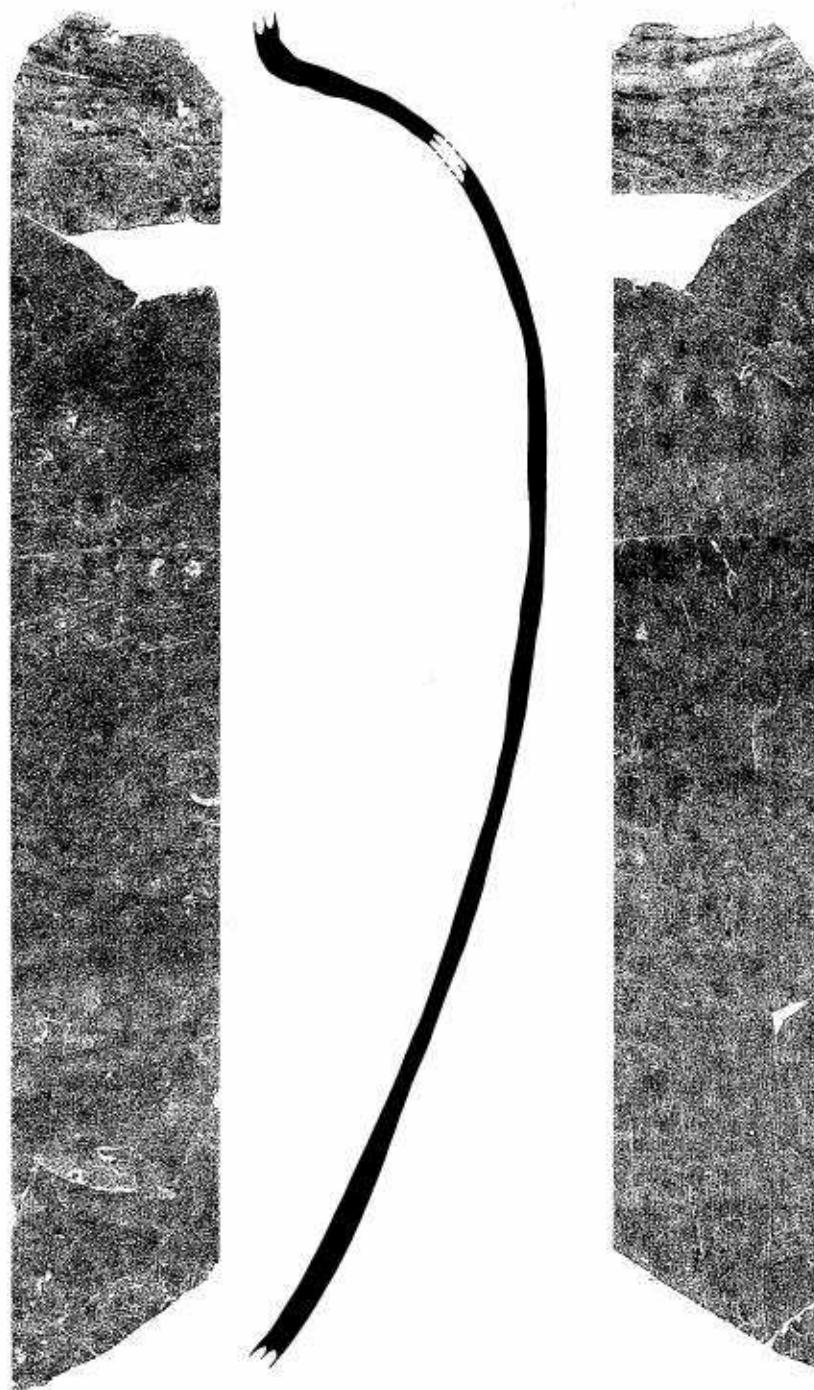
D区 遺構平面図



E・F・G区 遺構全体図



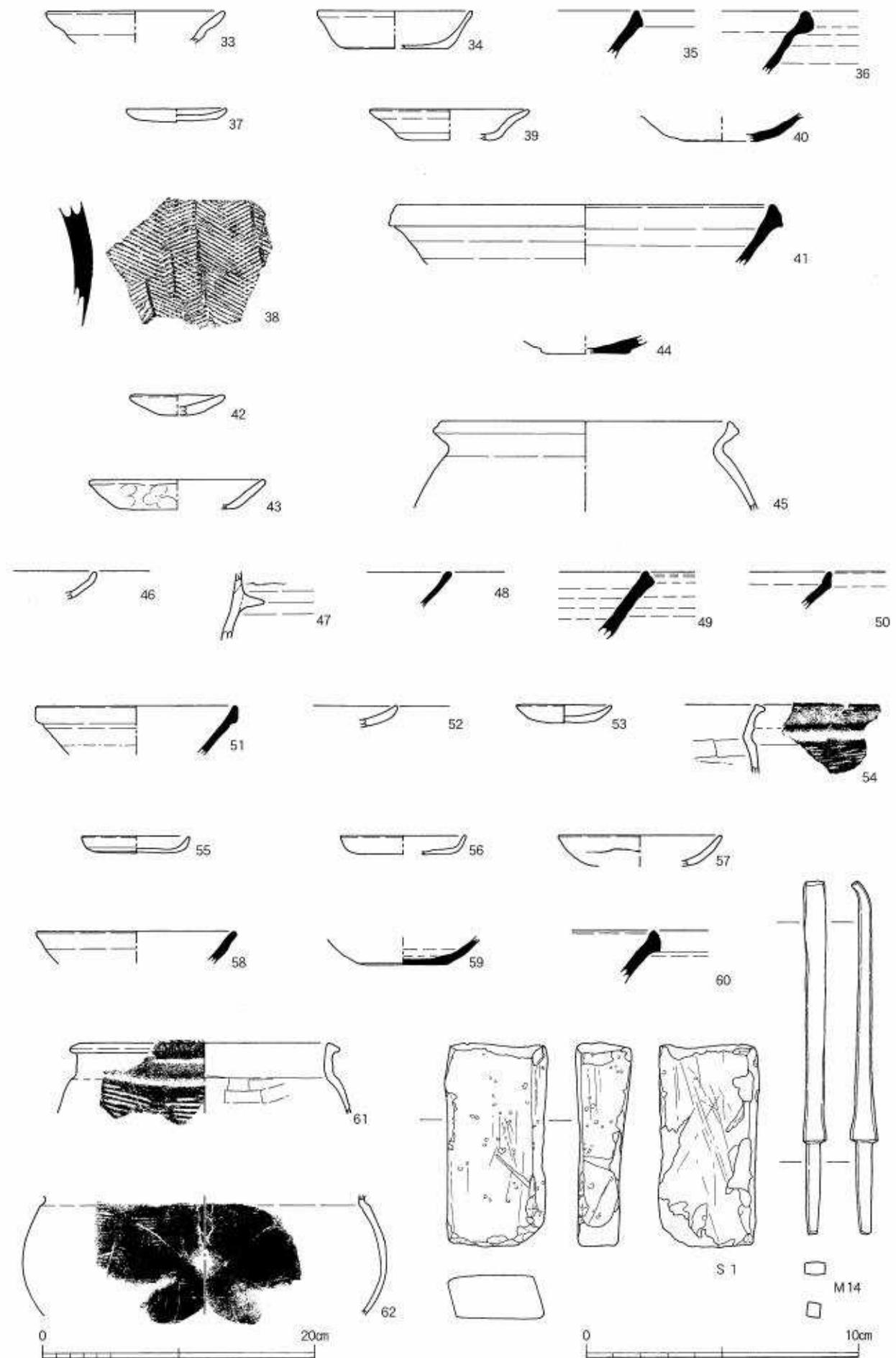
出土遺物（1）



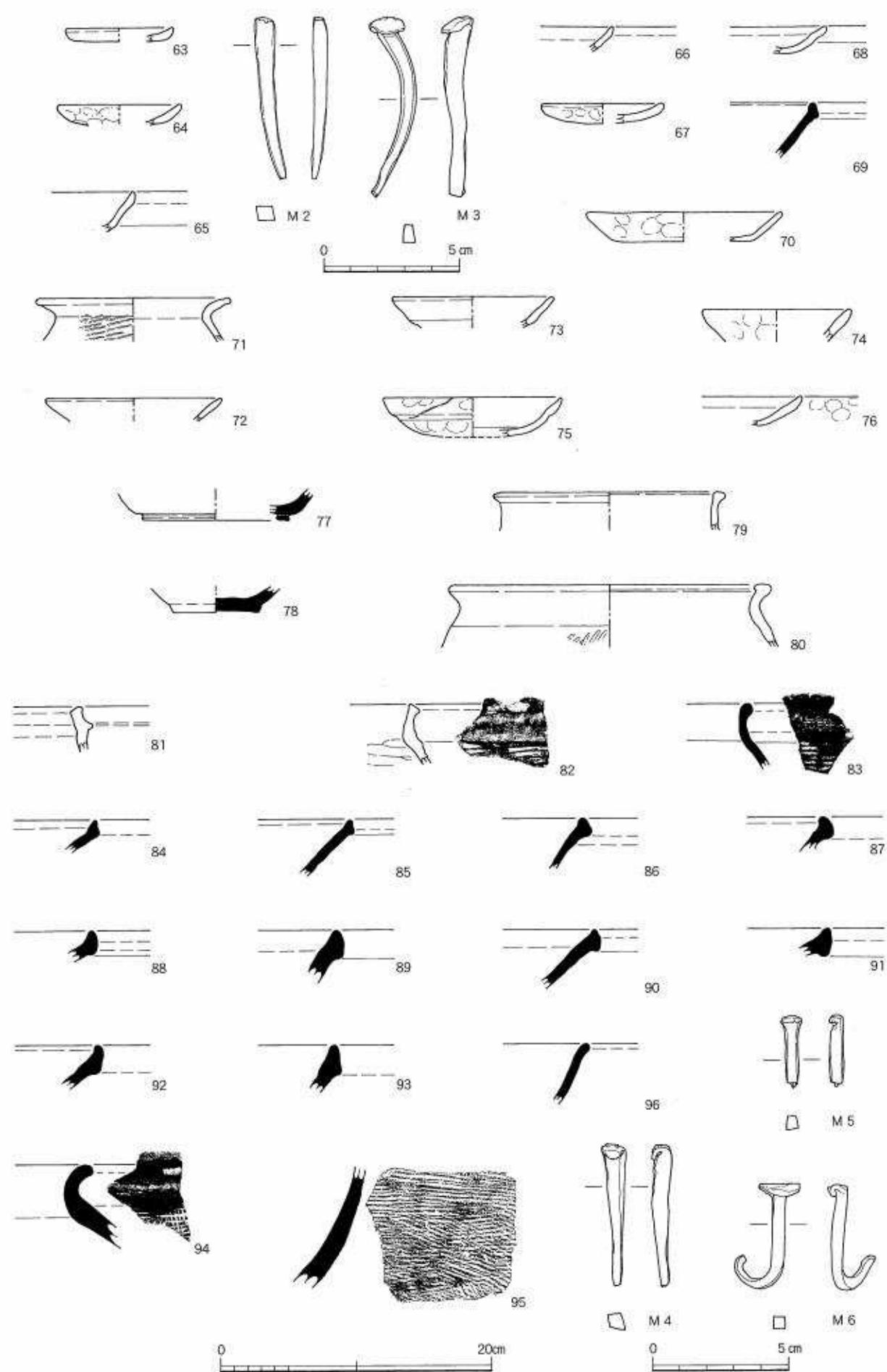
32



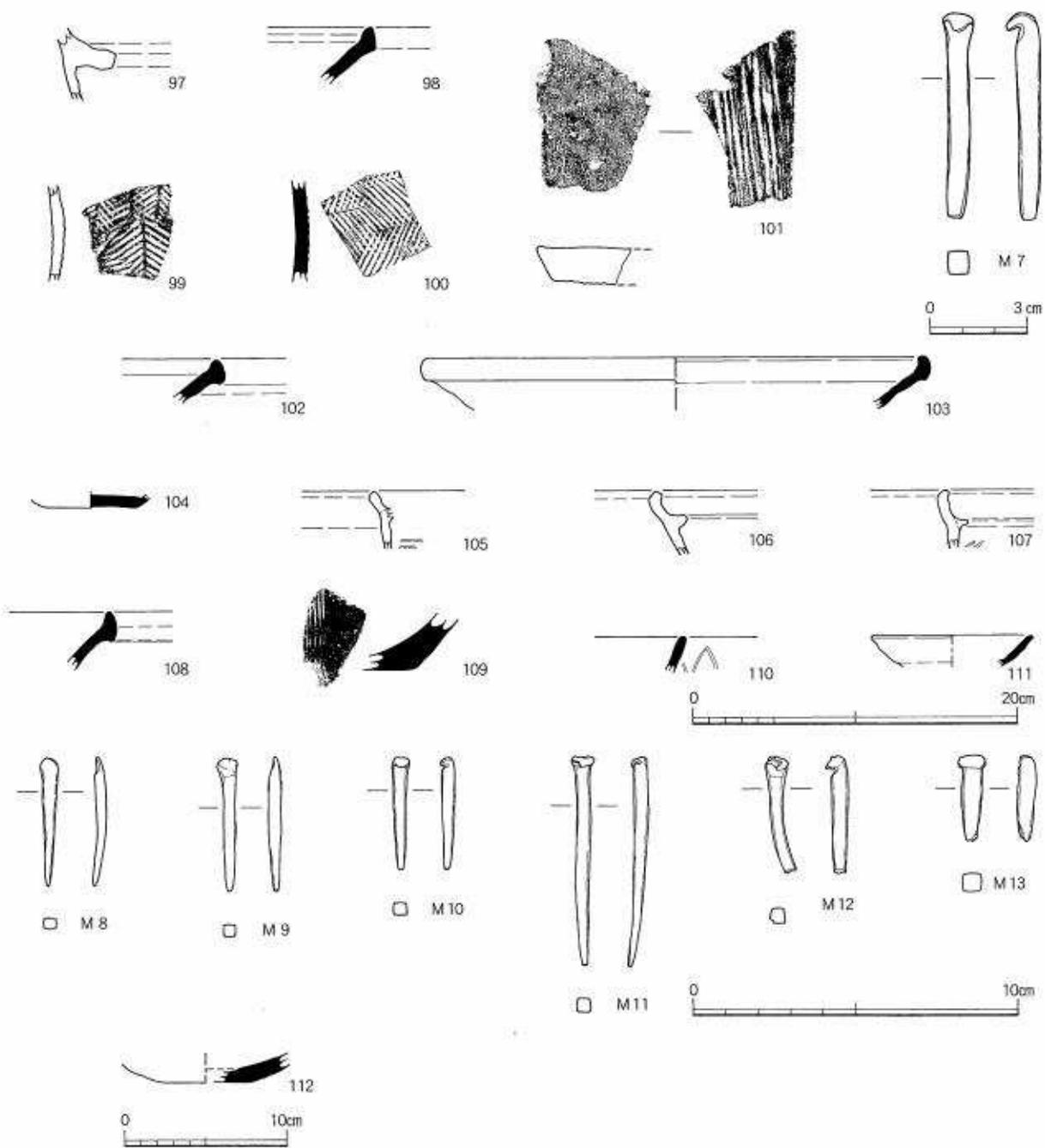
出土遺物（2）



出土遺物（3）



出土遺物 (4)



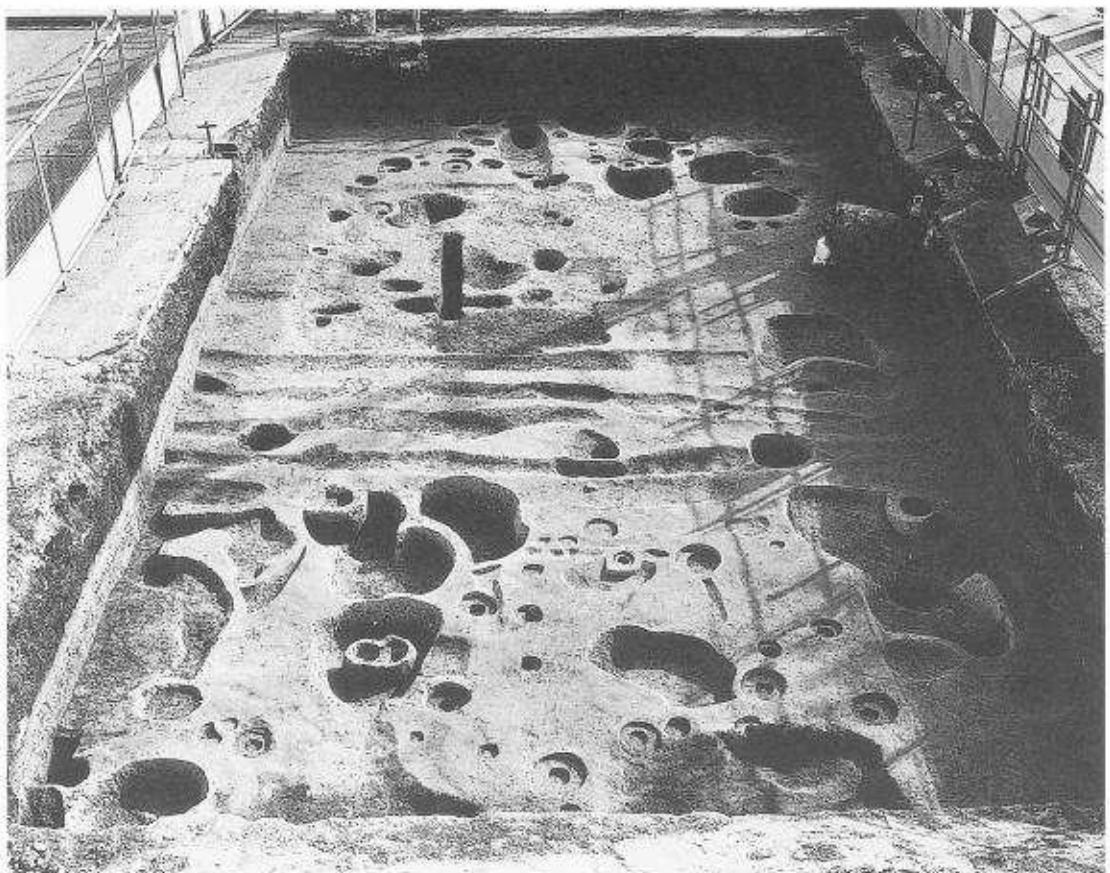
出土遺物（5）



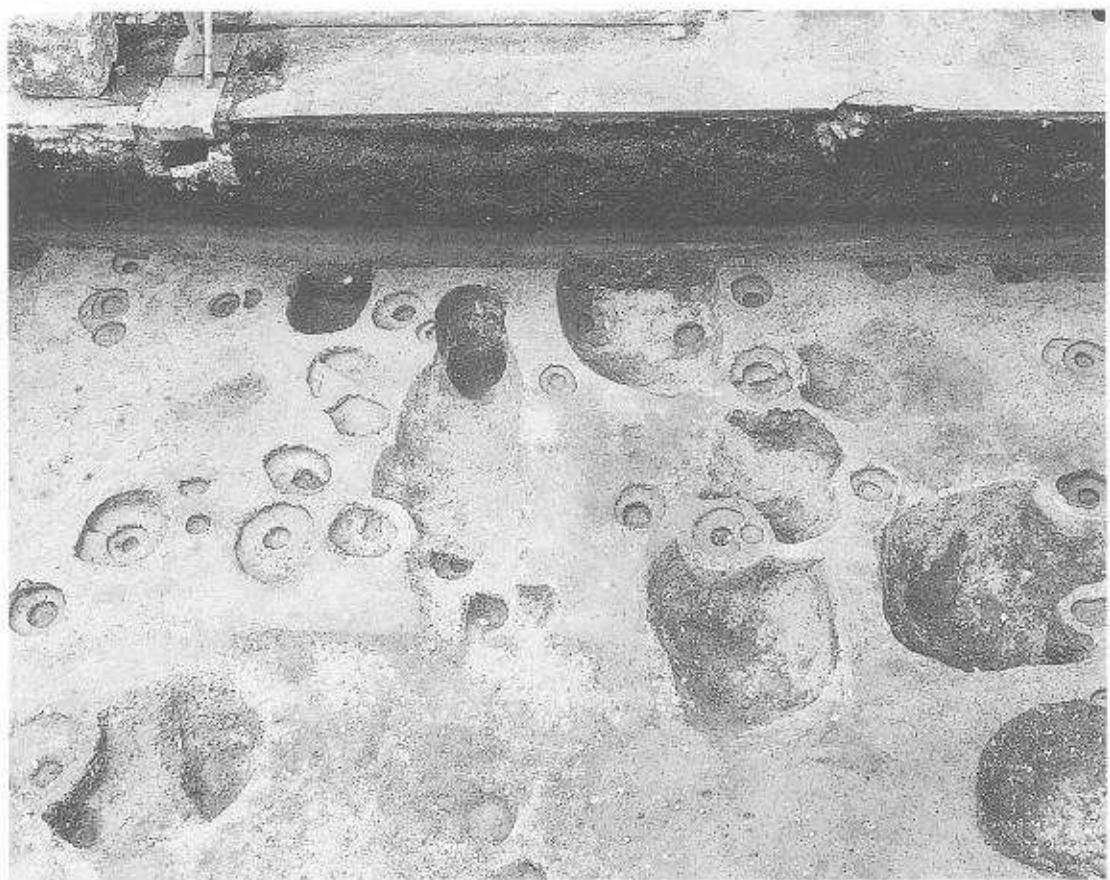
A区1・2全景（北東から）



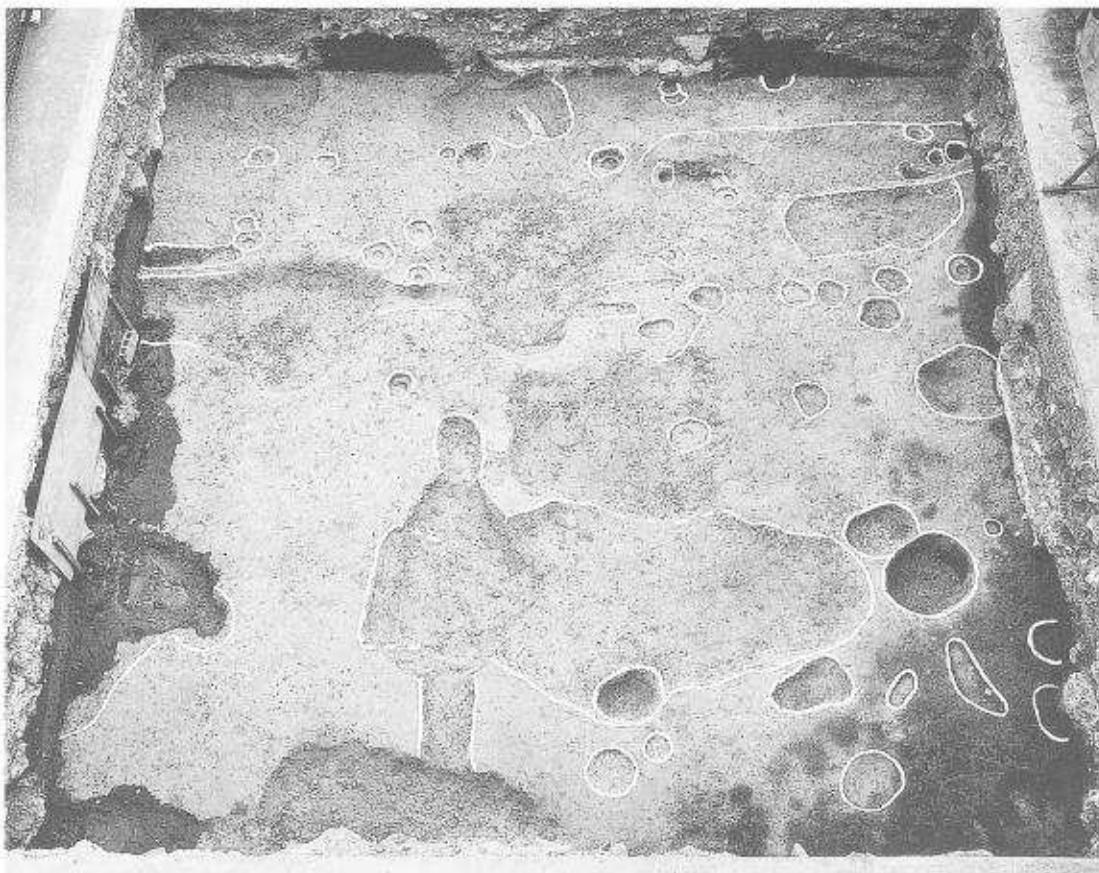
B1区全景（南西から）



B 2 区全景（北東から）



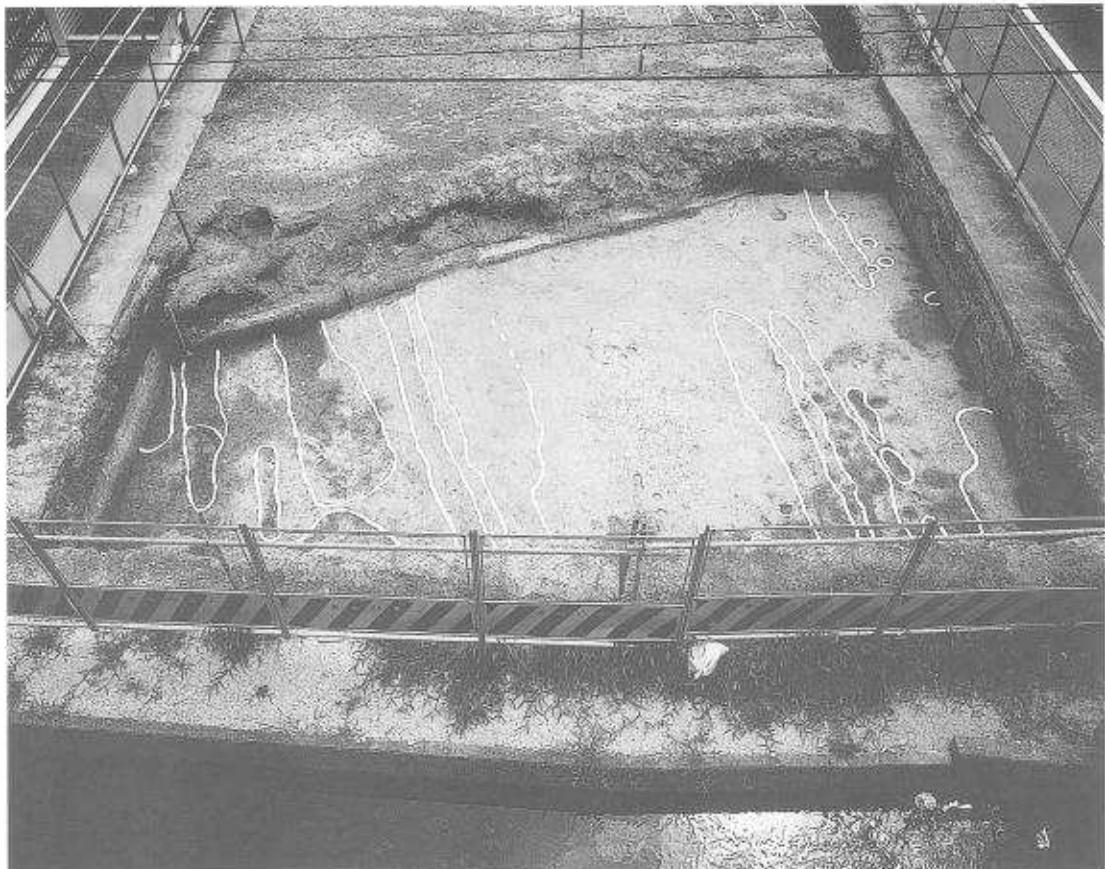
B 2 区南西端近景（北東から）



C区全景（南西から）



D区・E 1区全景（北東から）



E 1 区全景（北東から）



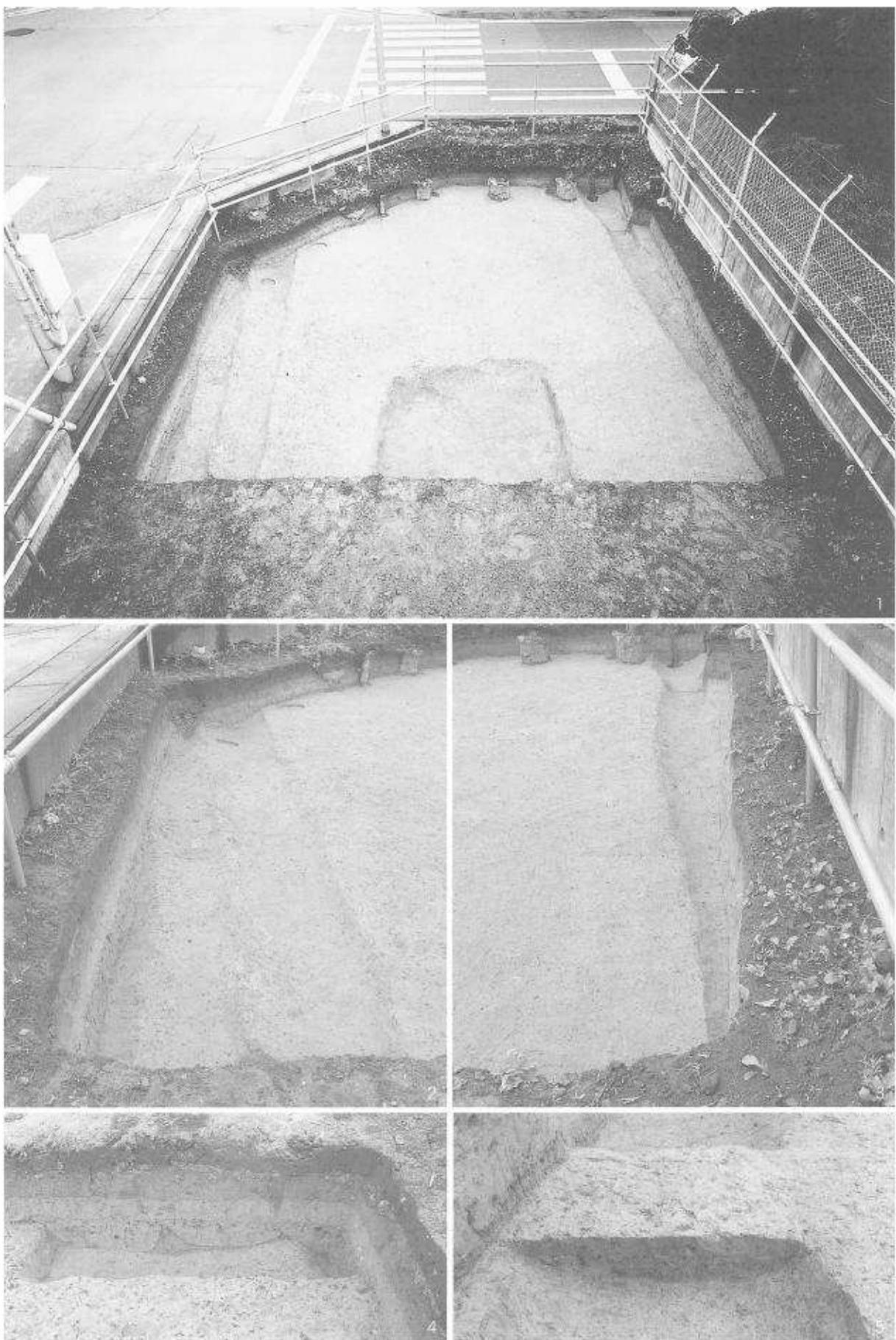
E 2 区北東側全景（南西から）



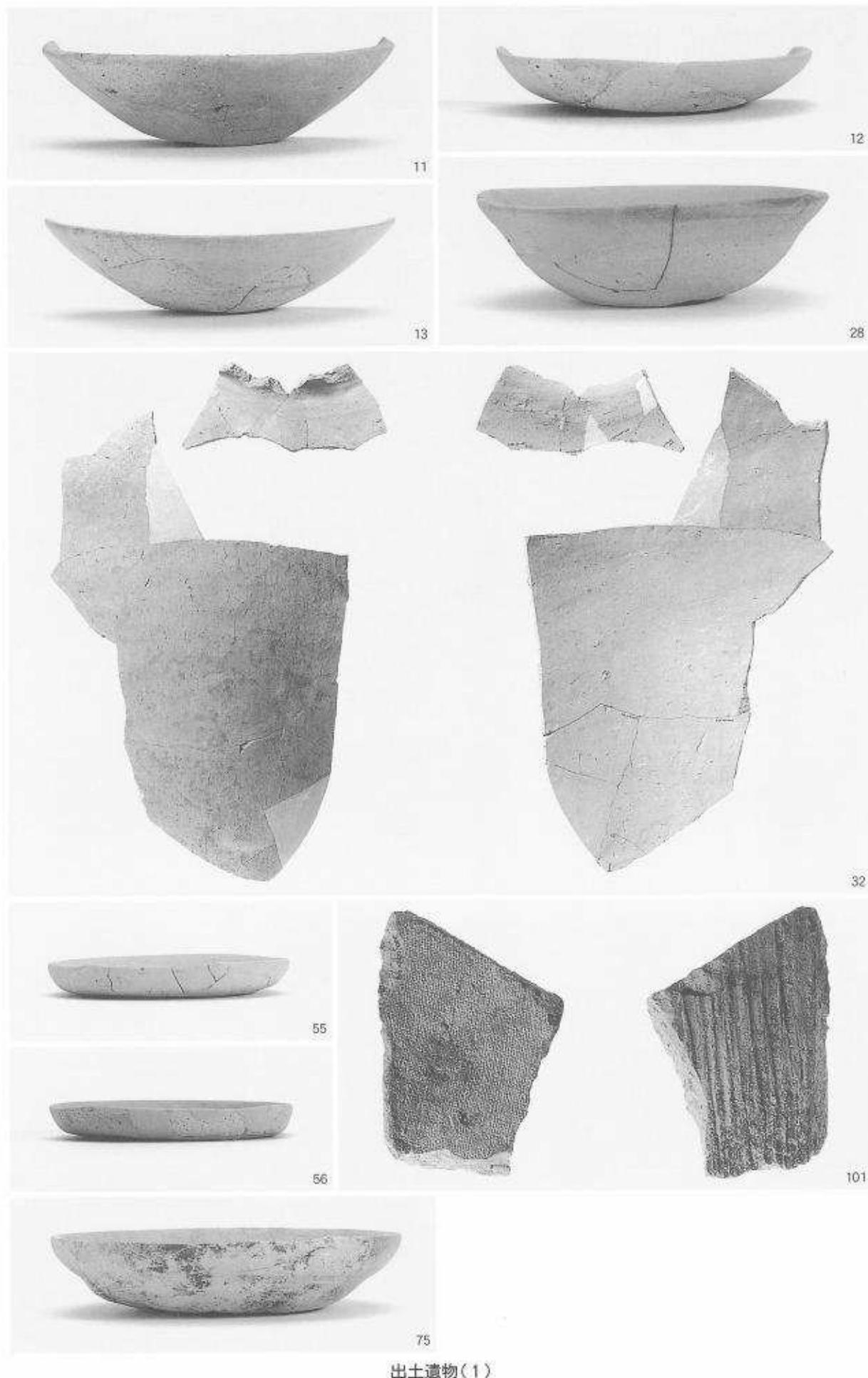
E 2区南西側全景（北東から）



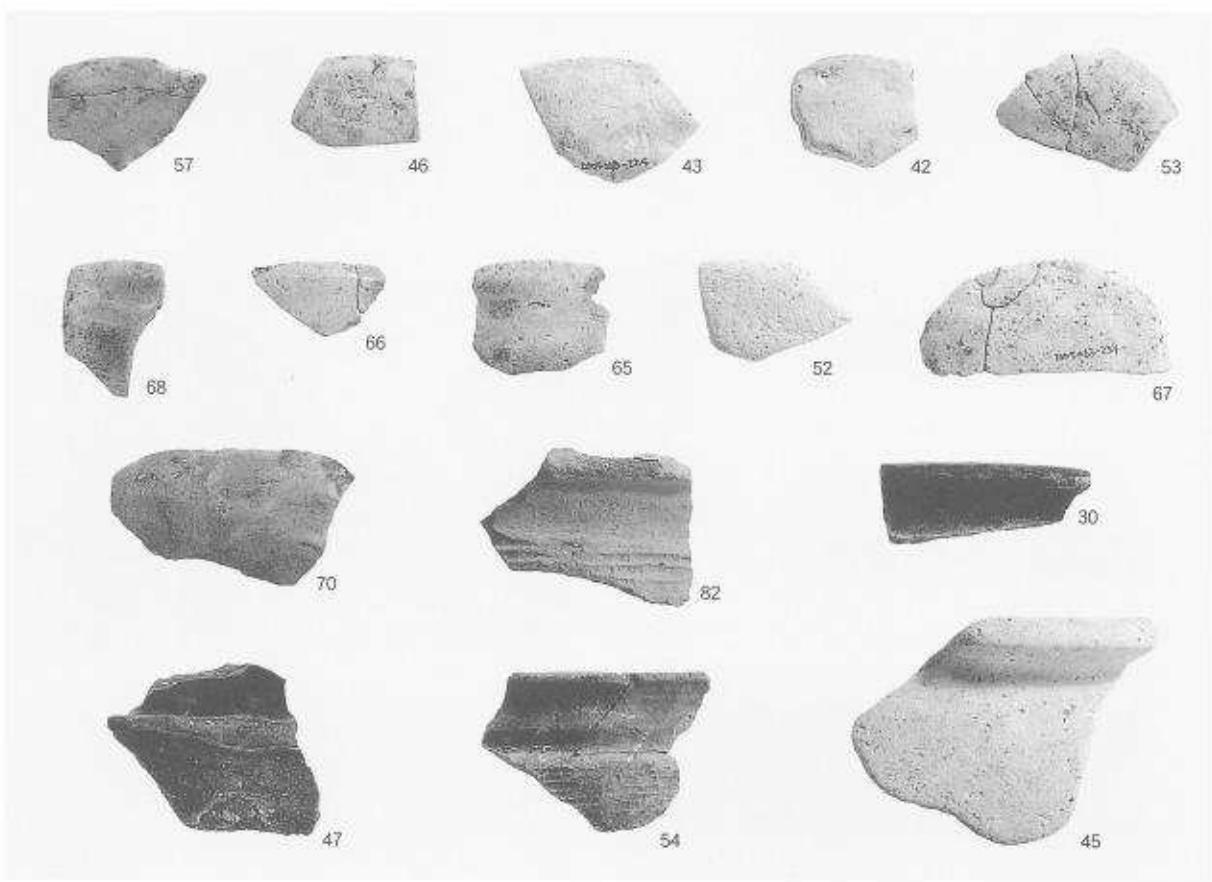
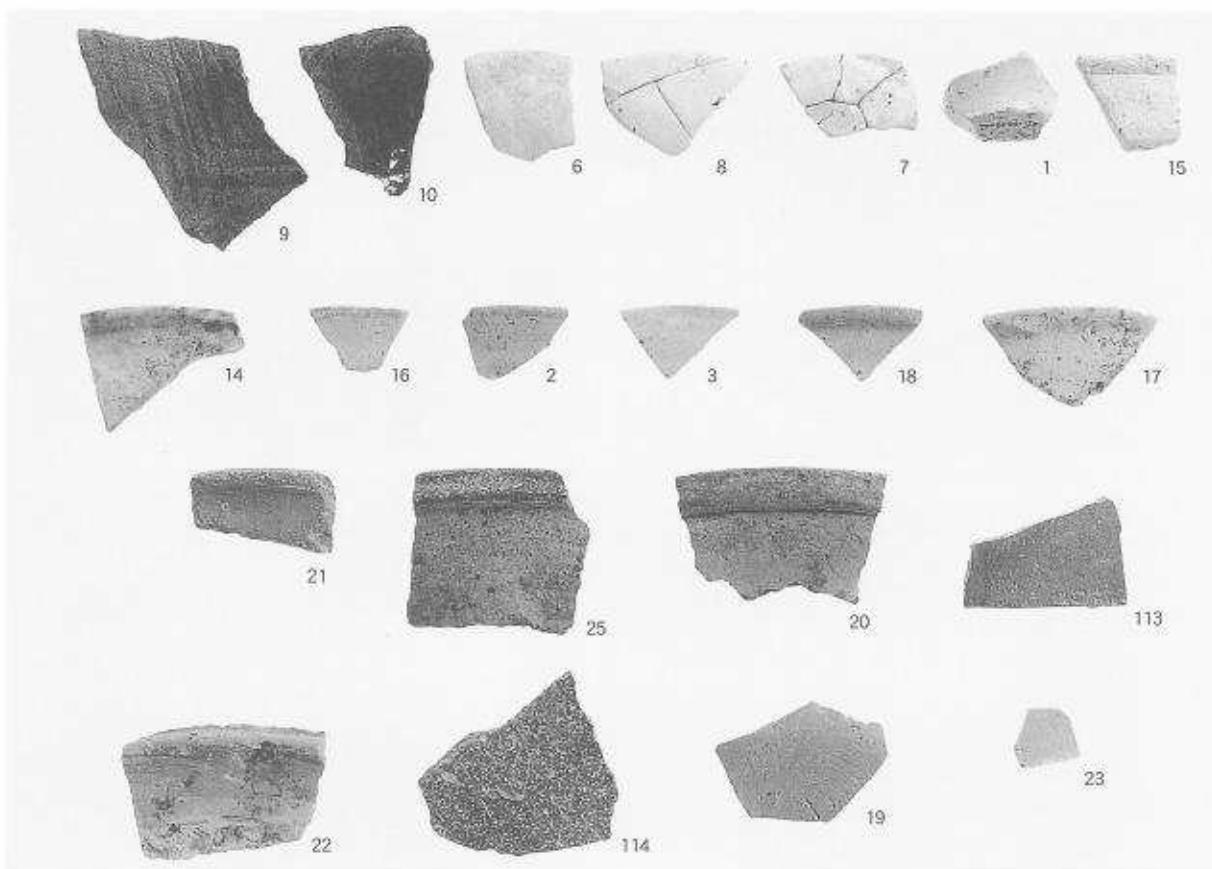
F区全景（北東から）



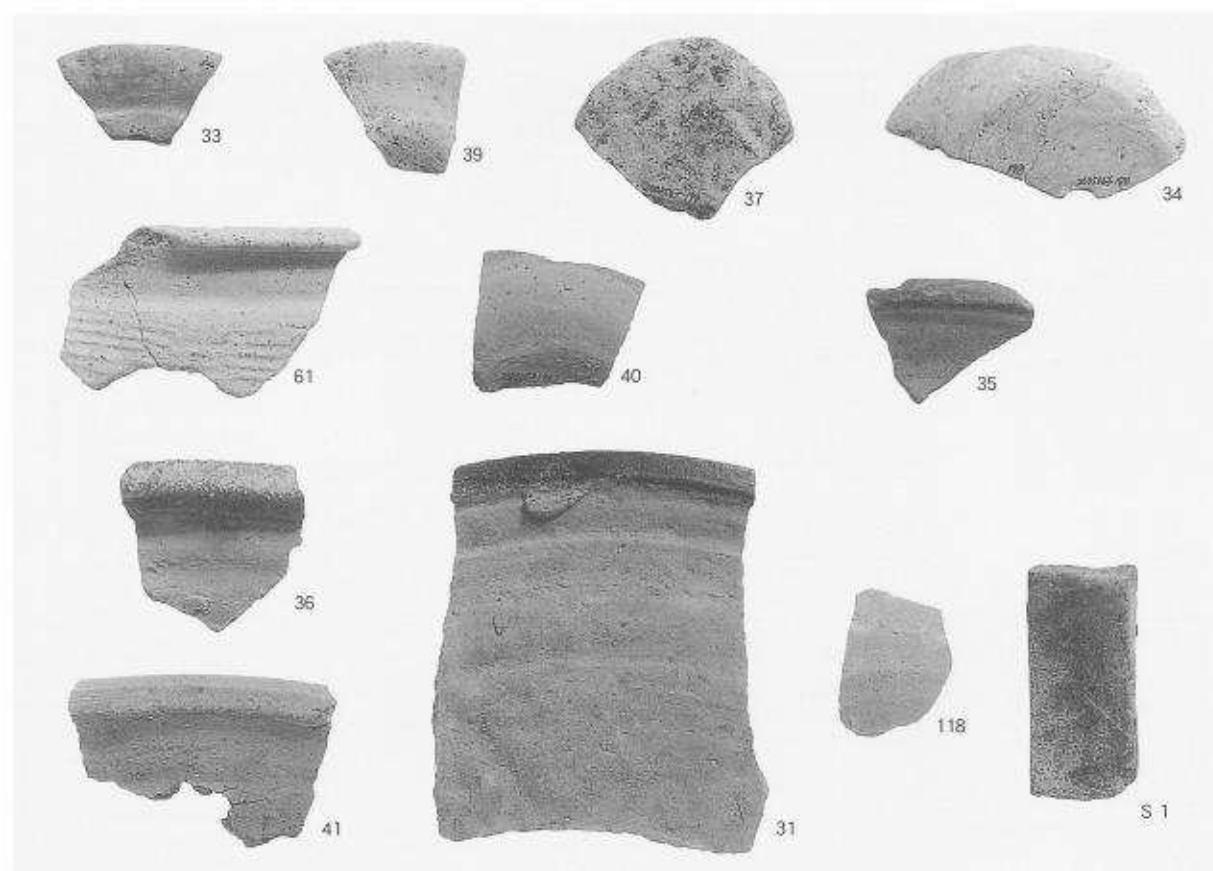
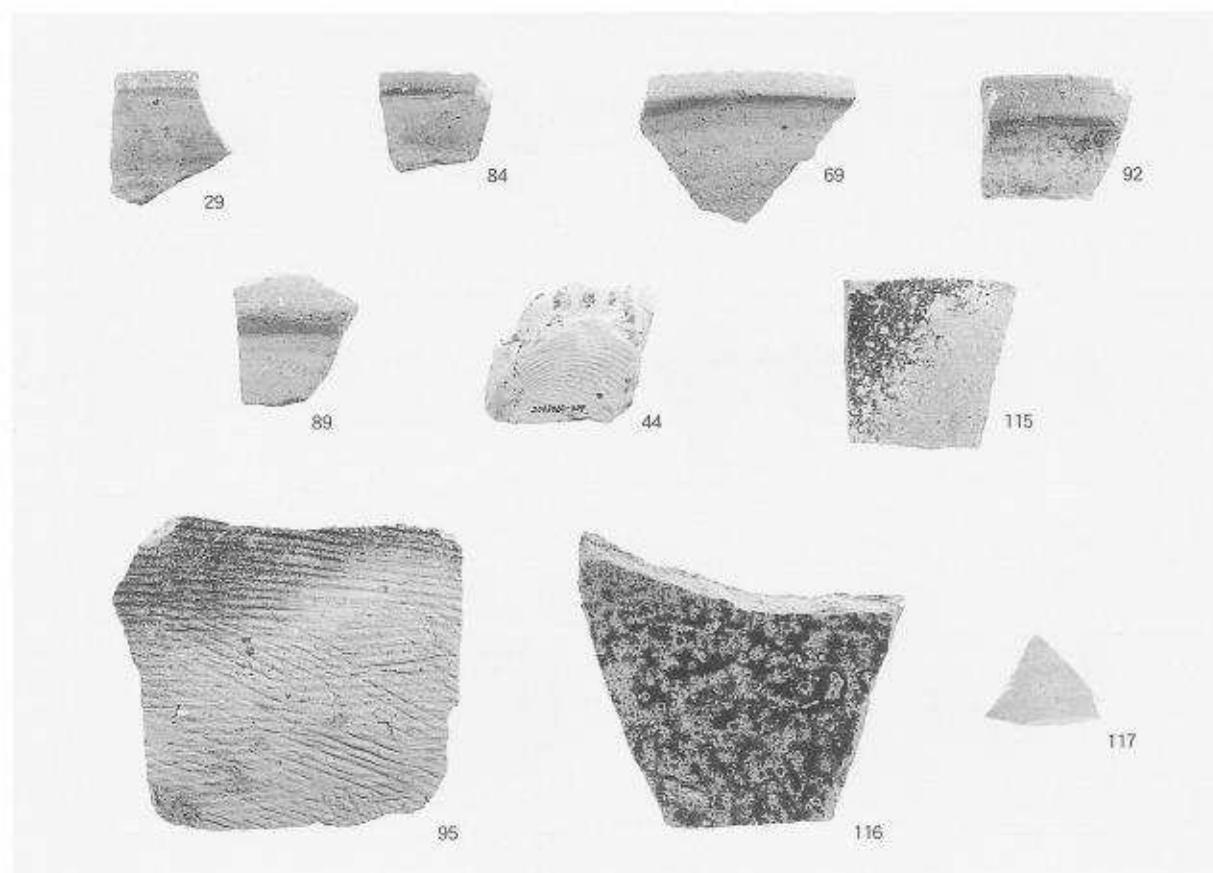
1. G区全景（東から） 2・3. 溝近景（東から） 4. 南西側溝土層（東から） 5. 北東側溝土層（東から）



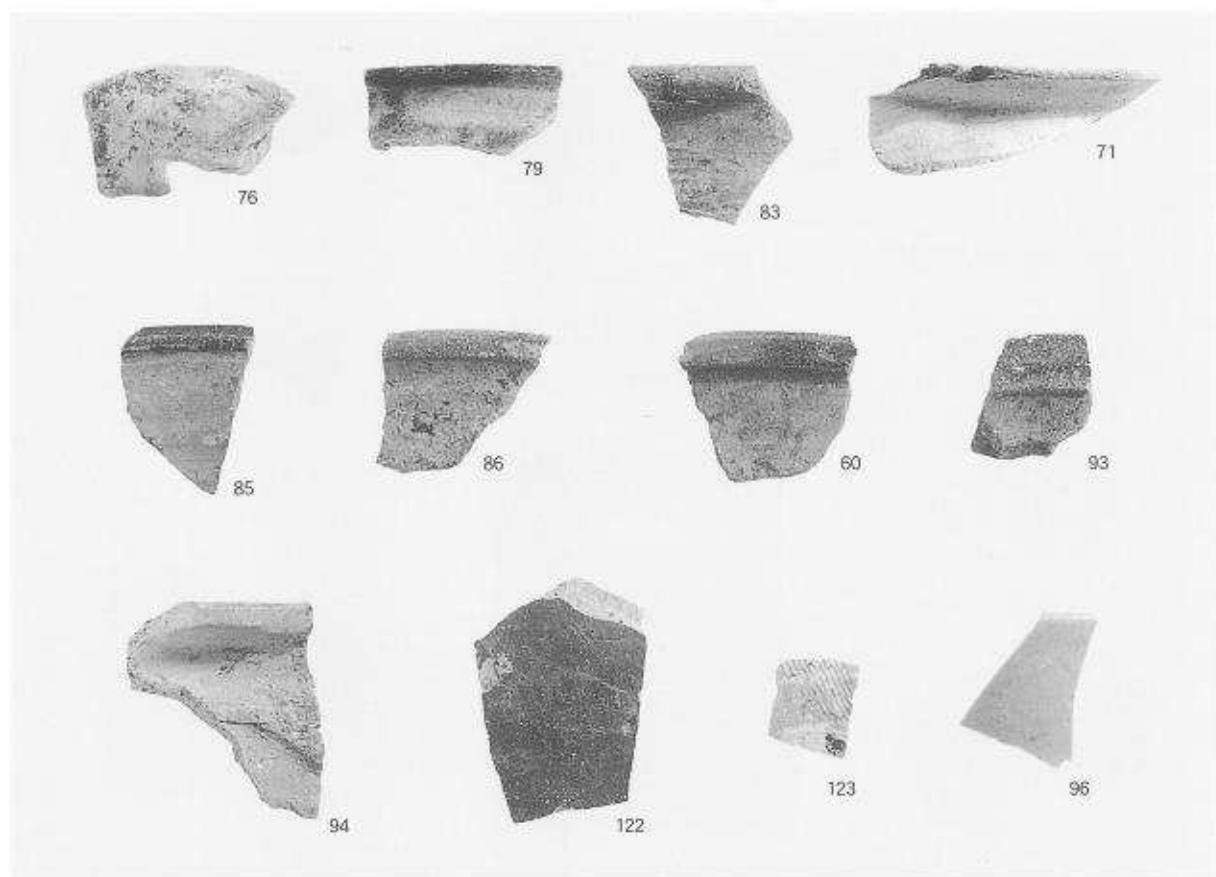
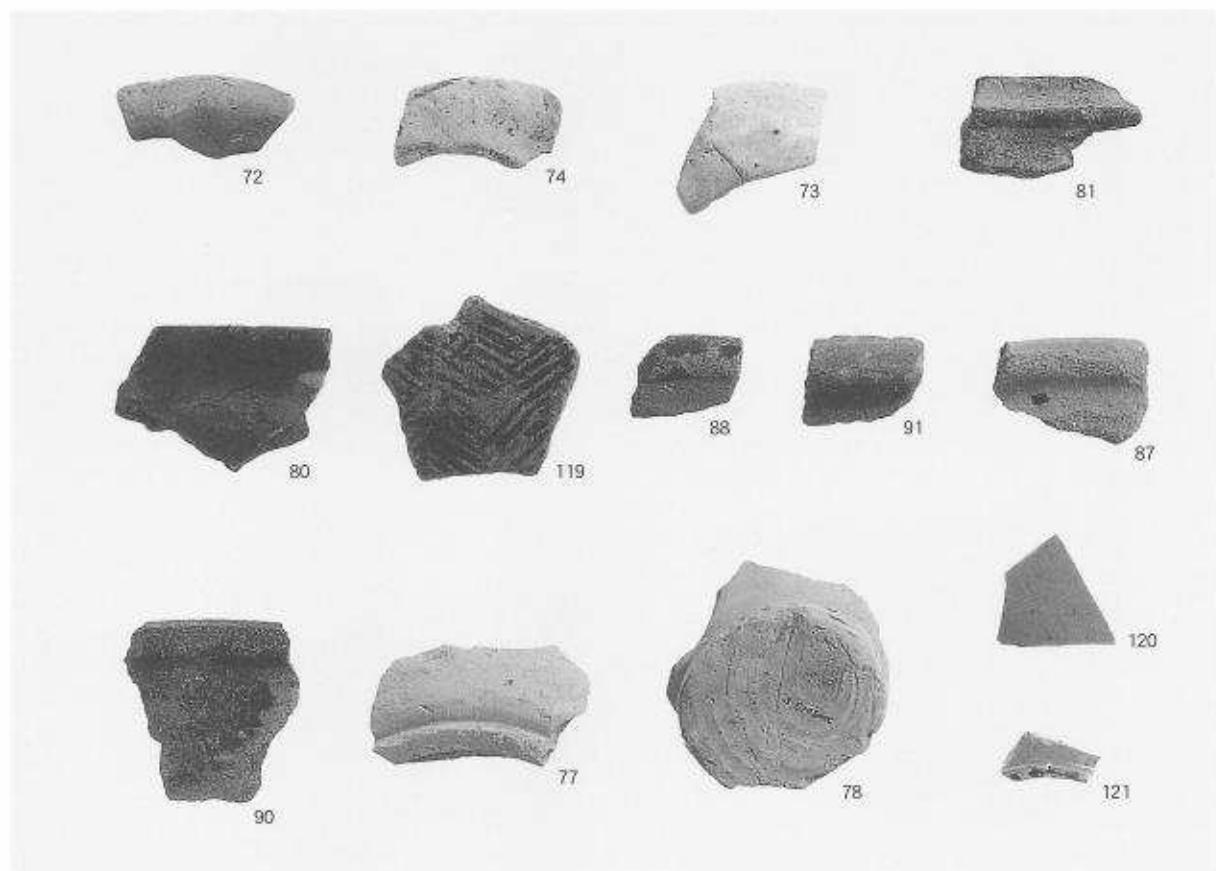
出土遺物(1)



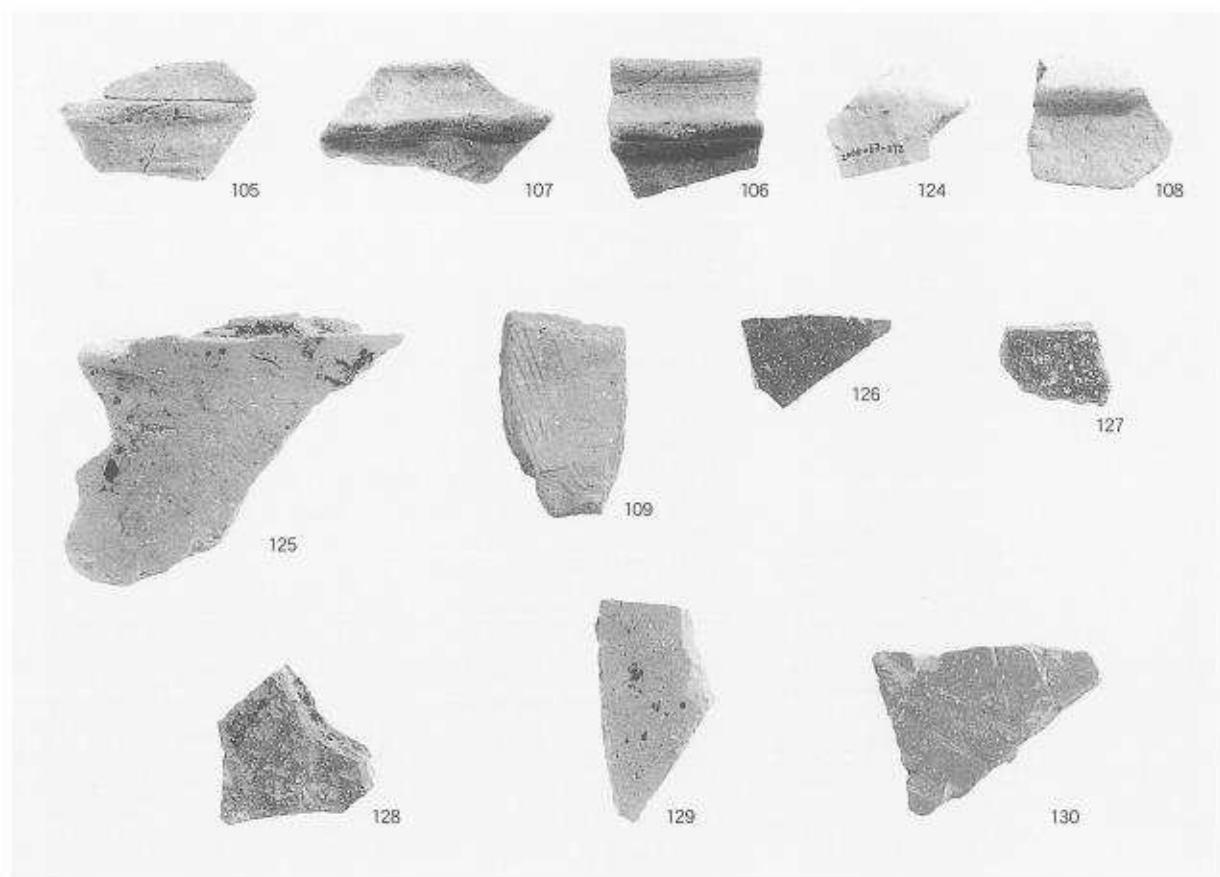
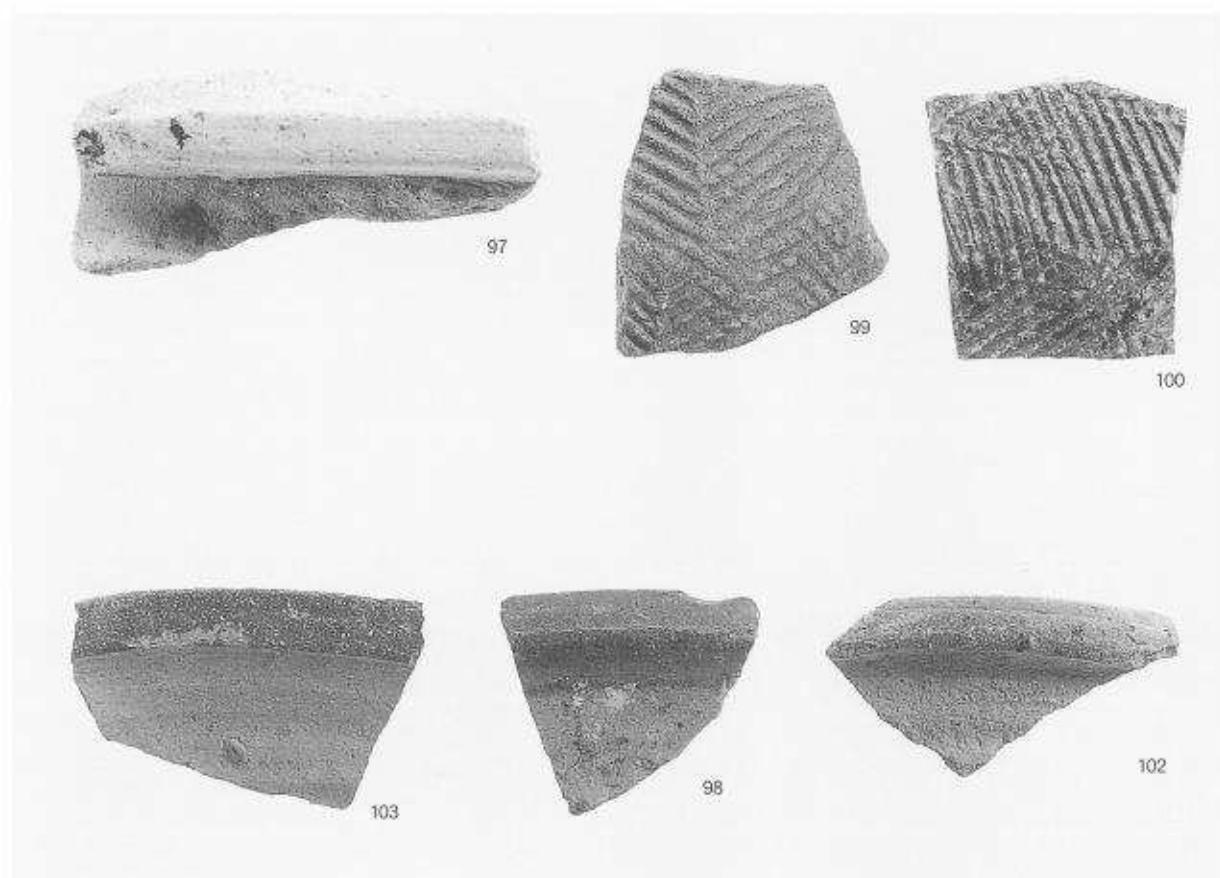
出土遺物(2)



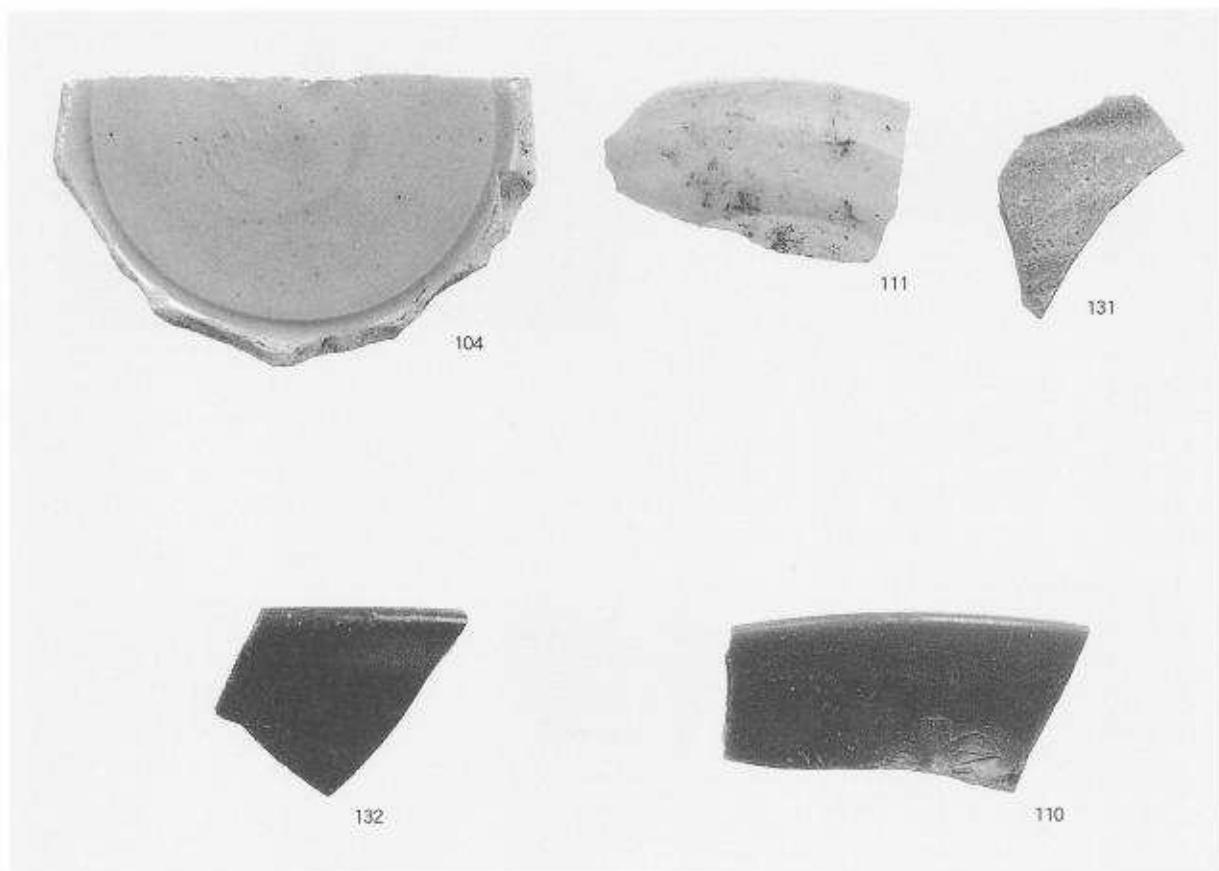
出土遺物(3)



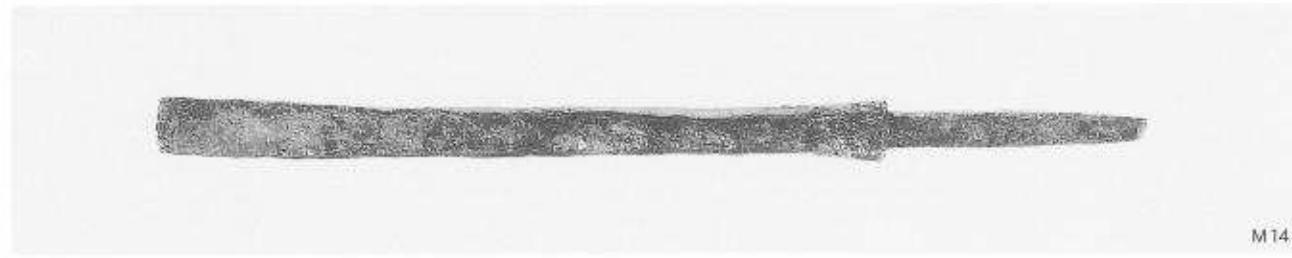
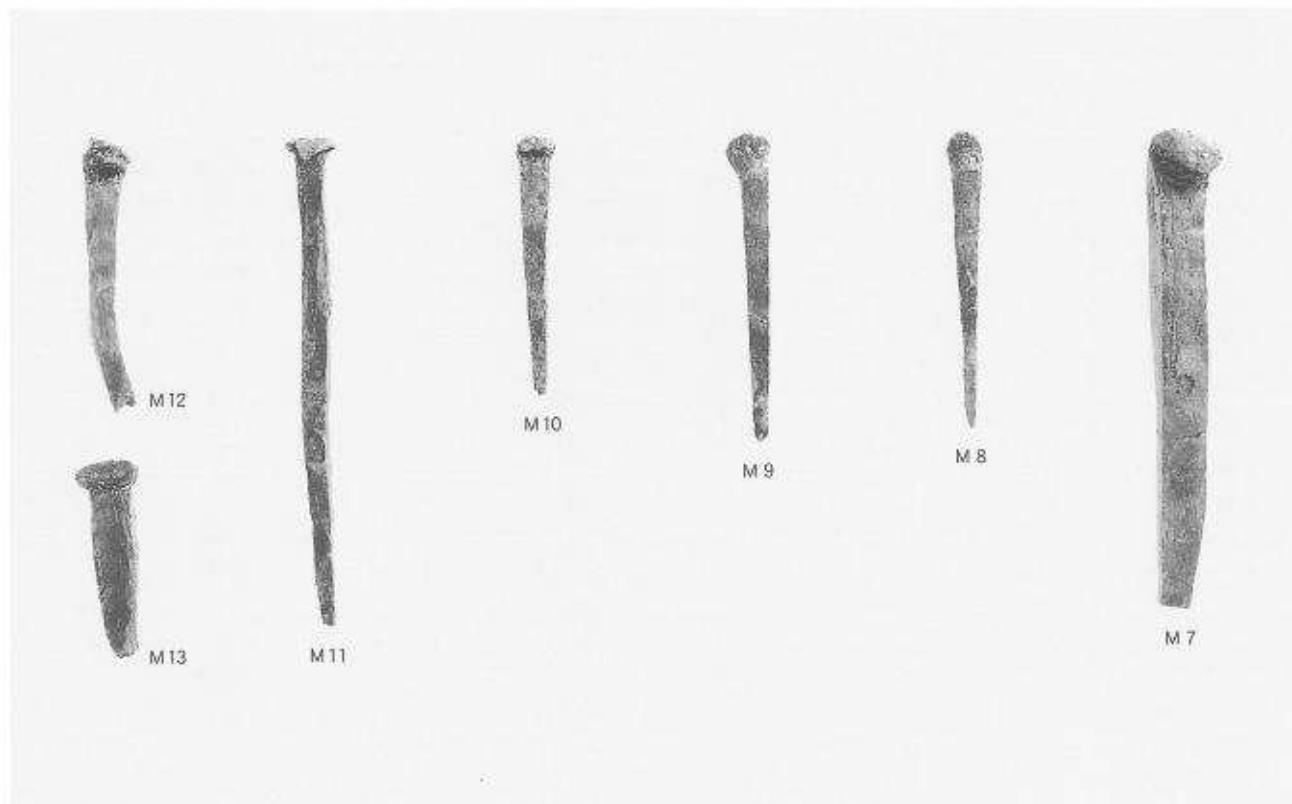
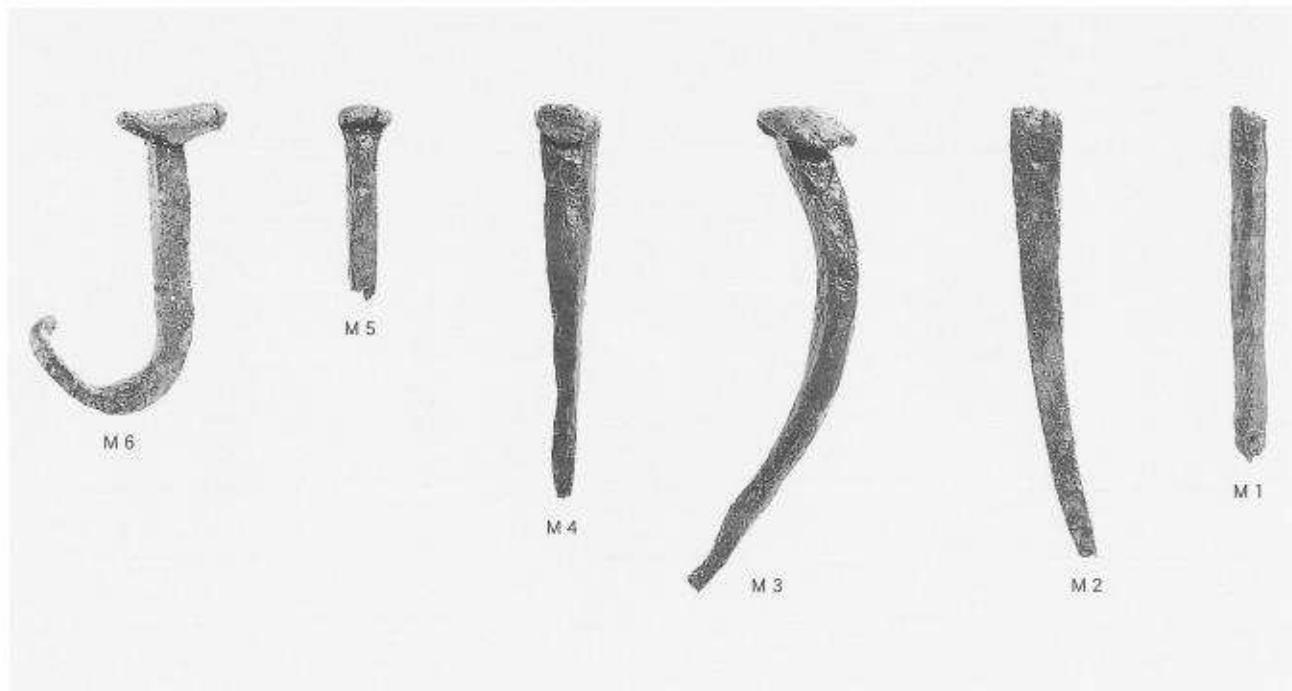
出土遺物(4)



出土遺物(5)



出土遺物(6)



出土金属器

兵庫県文化財調査報告 第348冊

加古川市

粟津大年遺跡

平成21年3月23日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中500

TEL 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 株式会社ソーエイ
〒673-0898 明石市樽屋町6-6
